緑衣の王様

綾無雲井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緑衣の王様

【Ｎコード】
Ｎ９２４７Ａ

【作者名】
綾無雲井

【あらすじ】
何で俺がこんな羽目に陥ったのか、未だに見当もつかなかった――。引き籠り女エミに閉じ込められた王様の奮闘記。

第一話：緑衣の王様

金魚の親爺が死んだ。

原因は窒息死か餓死だろう。水が汚かった、エサもなかった。まー、あの親爺はもともと健康な方ではなかった。

退屈に溺れる毎日。いつも出っ張った腹を揺さぶって俺を笑わせる、お人良しバカの親爺。それがオレンジの衣装から白い腹をのぞかせて、浮かび上がって来たのは今朝のことだ。あいつが死んで、この世界に残るのは俺とこの陰気な女だけになっちまった。

そんだけの話と言えば、そう。

「デブリン……」

狭苦しい部屋、俺が閉じ込められたこの世界でさめざめと女は泣く。普段は額の両脇にしりぞく剛毛の前髪が、今日ばかりは役目を果たしていた。顔が隠れて物凄く暗いんだわな。

お前のせいだってのに。

結局、親爺は死ぬまでデブリンと呼ばれた。あんた、つくづく浮かばれねえよな、金魚の親爺。

うねるように澱んだ空気の部屋。此処はアパートらしく、隣の部屋から漏れる深夜番組のくぐもった音がさらなる陰気さの演出に成功している。唯一部屋を照らしているエセ太陽――蛍光灯の明かりも人工的というか趣味が悪りぃというか。とにかく、此処で暮らしてきてわかったのは、この女は非常に趣味が悪いということぐらいだった。

――俺の見事な緑衣が宇宙人みたいにライトアップされちまったらどうすんだよ。メキシコ産まれの王者にこんな扱いしやがって。

“メキシコ産”だぞ。おい、聞いてるか？

というか、聞け。

小さい島国で、しかもアパートで、冴えない女とサバイバルに共同生活するべきサボテンじゃない。第一色気がねえ。

ぐすぐすと鼻を鳴らしながら女の引き籠もっていた布団の中からひときわ大きい嗚咽と、そして屁の音がとどろいた。

……マジかよ。

色んな音を出すな、やめてくれ。

女って生き物はなんでこう始終騒がしいのか、永遠の哲学だと思った。静かに親爺を弔えないのか。

トゲをすくめて、人間のように二酸化炭素だらけの溜息を吐けたらどんなにいいことか。

月夜の晩を遠ざける部屋。重苦しいカーテンが俺たちを閉じ込めて、今日もまた“誕生の挨拶”が出来ない事実にもう嘆く気も失せていた。

「あらアンタ、まだ“誕生の挨拶”してないの？　無断でこの世に腰を下ろしているなんて、なんて図々しいのかしら！　ワルイことは言わないから、天の日陰さまにご挨拶いたしなさいな」

「うるせえよ」

「まぁっ！　ダメよ、そんな口の利き方」

甲高い鳴き声で小言を言うのは年齢不詳のメス鳩である。朝だろうが昼だろうが下がっている小憎らしいカーテンの向こうで胸を張る、彼女のシルエットの寸胴さから見かけの悪さを想像できた。六児の親と噂される彼女のお節介ぶりは正直鬱陶しいのだが、かと言って他にすることがないというのが淋しい植木の宿命か。

――根強くなる為に生まれたはずだったが。

人生の始まりが狭苦しいこの部屋でってのは実際予定外だ。俺が目を覚ましたのは大抵の生き物が寝静まった時間帯だった。生まれた時間が夜ならば、陰（かげ）様に挨拶しなければならないのがこの世界の掟。

天の日陰様の片割れ――つまりは月の婦人――に、これから宜しくと声を掛けようとしたが、生憎初対面から愛想のなかったカーテンのヤツが俺達の間を阻んでいた。

「アンタそれでも生物界の評判が悪いんだから」
「――知ってるよ」
それぐらいいくら自分の身辺状況に疎い俺だって知っている。天の日陰様に認めてもらえないということは、他の生物にも認めてもらえないということだ。俺と同期であるこの部屋の植物達は皆水不足で枯れてしまったし、唯一話し相手であった金魚の親爺も死んで、今俺に話しかけてくるのはこの物好きなメス鳩ぐらいなものである。俺に話しかけているというだけで世間からは良い目で見られるはずがないのに、彼女のお節介癖は収まることをしらないらしい。
別にそこまで誰かが必要な状況でもないのだが、俺ってサボテンはそんなに人恋しそうに見えるんだろうか？
おいおい冗談じゃねえ。心外だ。
「ガキが飯待ってるんじゃないのか？」
俺の含みを持たせた嫌味に言い返そうとした彼女は、微動だにしない俺の影を前にしかし諦めたように羽ばたいていった。
やれやれだ。暫く羽音が遠ざかる様子に聴き入る。
お喋りなメス鳩が消えてより静けさが増した気がした。シン……、とした部屋を眺めて今日も時間をやり過ごすのだろう。
こんな毎日の何処が楽しいのだろうか？　ＴＶで観てわかったことだが、どう考えてもうちの冴えない女は“引き籠り”と呼ばれる品種の一歩手前。仕事があいつの唯一の活動時間で、後はこの部屋でなんにもしない。人間って生き物は仕事といっても屋内に居ることが大抵らしいし、出掛けるとかしないと、光合成が出来ないんじゃないんか？
そうだ。
それだよ。
光合成が出来ないからあの女は縁起悪りぃ顔ばっかしてるんだ。どおりで水やりもエサやりも忘れる。
俺は水不足でもやっていけるが、それにしても厄介な女の家に生まれちまったもんだね。

換気のなされていないこの部屋は浄化するだけで一苦労だってのに。
せめてこの前通販でやってた、驚きのお値段とやら――空気清浄機を相棒に欲しいよ俺は。
考えても無駄なので、ふて寝することに決めた。

ガチャリとかガチャンとかそんな感じの音がしたのは多分お日様が地球の裏側で眠りにつこうとし始めた頃。「おじゃましまーす」と若い女の声が響いて、俺を驚かせた。うちのあの女が、他の人間を連れてきたなんて。
「何もないの」
消え入りそうなうちの女の声に、俺は胸中で趣味も悪いぞと付け足した。土色に髪の毛を染め上げている来客はうちの女の同僚なのか、身軽な足取りで上がりこんできた。キョロキョロと室内を見回して、どうやら必死にフォローの言葉を探しているようだった。
まあ、見つからんだろ。
簡素な家具類を見回すことを諦めて簡易テーブルの前に正座した若い女はそれでも俺が感心するほど、見事に明るい声をあげた。
「そう？　エミの家すっきりしてて落ち着くよー」
「そんな事ないよ。この前も金魚死んじゃったし」
「……そう、なんだ」
折角の褒め言葉を即座に否定され、詰まったように来客は床を見つめた。
ダメじゃねえか、エミ。
どうやらうちの女はエミというらしい。サエミとかエミコとかかも知れないけど。
空気が読めていないのか、早く女に帰って欲しいのかとにかく気を遣った来客の発言に対して凄まじく破壊力を持ったカウンターパンチを効かせたエミの台詞に、俺は苦しくて仕方なくなっていた。
おかしいだろ、おかしすぎて二酸化炭素が吸えねえって。

「あ……。ゴメン」
エミが呟いた。
何を謝ってるんだろうと首をかしげた来客をよそに、エミはキッチンへ向かう。俺の予想ではきっとお茶を淹れに行ったのだと思うが、言葉が足りないので不可解な行動にしか映らない。エミがそんな調子なんで来客である若い女は始終首をかしげる羽目になった。
当然のことだが、そんなんで長く続くはずがない。
結局暫くして、来客は用事があるとかなんとか言って、そそくさと帰って行ったのだった。
ガチャンとかガチャリとかの音を残して。
その音を掻き消すようにぐんと落ちたのは、部屋の彩度だ。
――悪い女ではなかったが。仲良くしねんだからな、うちの馬鹿女は。
ふふふーん……。
閉じられた玄関ドアを何をするでもなく見つめて長い長い溜息を吐いたエミは、布団に這うように潜り込んだあと、気色悪い鼻歌を歌い始めた。背中の丸みで毛布を伸ばして不思議なメロディーを呟く。
『陰気コンサート』だ。久々に繰り広げられている、俺命名の彼女の十八番が。
初めてこのステージを目撃したときは寒気が走ったものだ。気色悪りぃから。それでも慣れってのは怖いもので、このおぞましい光景にも免疫がついて来ちまって彼女がステージを終えるのが大抵１０分後って分かる辺りが俺も相当世界基準からズレてしまったようで悲しい。時計を眺めて彼女の鼻歌が終わるように念じていると、８分程経ったところで毛布からエミの顔が覗いた。髪ぼっさぼっさ。
「お風呂……」
忘れてたのかお前。
怠惰に足を引き摺るようにして彼女がバスルームに籠もる。不思議なメロディーの騒音がなくなったところで俺は寝ることにした。

認められない女と、認められない俺。
小さなアパートの窓際から始まって、そして其処で終わるようなとんだ共同生活を強いられた。
但しあの馬鹿女は自分で自分が認められないのであって俺は違う。とばっちりとかハズレクジとかを引いちまっただけなんだが。
どうせ今夜も陰様に挨拶できねえんだからよ。
そんなんばかりだ、毎日。

オアシスは近所だったはずなのに、俺の間抜けな祖先は海を越えてこんな狭い島国に来ちまったんだと思った、夢を見ながらそうだろうと考えた。それでも執拗に思考を邪魔する気なのか屋根がバチバチ悲鳴をあげているので、夢が遠ざかって仕方なく目を覚ました。屋根うるせえ。
ったく、この部屋の時間はとてつもなくスローだから、極力睡眠で誤魔化したかったってのにまだ夜が明けたばっかだろう。
寝ぼけ眼の俺は出来るだけ窓の方向を見ないようにした。頭がおかしくなりそうなので、雨の日は嫌いだった。
いくら俺がメキシコの王者ってったって。数週間前にエミの客人が来訪したあの時の、堂々たる緑衣姿は消えている。
水無しに生きていける訳ではないのだ。ずっと、それこそ生まれてから人間の片手で数えられるほどしか、あの馬鹿女は俺に水をやっていない。届きそうで届かない所に栄養源が大粒で土砂降りしていると思うと、拷問にさらされているようで本当に、気がおかしくなりそうだった。
しかし気が滅入るこちらをよそに、目覚ましのアラームに急かされてエミが起き上がったのは、スローな2時間をなんとか俺が耐え抜いた時だった。土砂降りであのメス鳩も来ない中にいると、数日くらい耐えた気がしたがね。
今日はどうやら人間にとっての休暇日らしい。
植物には休息なんてものはないんだが、それに比べると人間は何

ともややこしい世界に生きている。休日という至福を設けて安らぎを得るらしい人間の性質に例外なく、エミも今日はやけに寝起きが良いように思えた。どうせ一人でゴロゴロする目論見だろう。何もせんなら俺に水を与えろ。

相変わらずぼっさぼっさの髪を梳かすこともせずに、トーストを焼いて口に詰め込み始める。

エミは味わって食べるんじゃなくて、収納するって感じで詰め込む。そして烏龍茶も無表情に収納する。あぁ馬鹿野郎、この際烏龍茶でも良いんだよ俺の水分を収納するな。

何だか少々怒りが湧いてきたが、怒ったら水分が出ていく気がするのでどうにも力が抜けてしまう。

エミは暫く何もせずゴロゴロして休みを満喫する気満々だったのだろうが、その時出番の滅多にないはずの彼女の携帯が鳴った。明らかに迷惑そうな顔をしたエミは床の上に放り出されたバッグに手を伸ばし、多少無理した弾んだ声で「もしもし」と応対していたものの、相手が判明した途端疲れたようにトーンが下がっていた。

会話の流れから言って、相手は彼女の実家の母親のようだった。今日来るらしい。

「忙しい」と断ろうとするエミだが、どうやら母親の方は娘と違って押しが強い女らしく、あっけなく雨の日の突然訪問が決定されていた。エミはよっぽど母の訪問がイヤなのか、通話を切った途端にベッドに携帯を放り投げて「何で来んのぉ～」と呻きながらうずくまった。

人間てヤツは一人暮らしを続けると独り言が増えるという噂を聞いたことがある。エミもその属性に入るようだ。

１０分程、うずくまったまま身動きをせずにいた彼女だが、突如何かのスイッチが入ったように立ち上がり、脱ぎ散らかした服や放り出された雑誌なんて物を片付け始める。

片付けるといっても、だ。

この馬鹿女はクローゼットに押し込んだりなんなりするだけって

んだからタチが悪い。
良いのかねえ、綺麗にはなってねぇしよ。
俺様なんてのは見かけどおりのエコロジストなわけで、人間のために日々酸素を放出してやっている立場としてはエミの手抜き加減に溜息ものであるわけだった。
大体植物界の息は人間と違う。嫌味で出した溜息まで、不可抗力で何故か世界を浄化するんだぜ。嫌味だってのに。
そこんとこで、人間に属するエミはちっとは俺を尊敬してもいいんじゃねえかと思う。
感謝とかよ。
この世の理不尽について俺がしきりに考えていると、インターホンが騒ぎ出した。
一言で黙ればいいものを、今日のインターホンはやけにしつこい。掃除もどき中だったエミの額の両脇の前髪は湿気のために不機嫌に跳ねていて、面白いくらい迷惑げな表情をしていた。
おい、馬鹿女。
とにかく俺は、これから始まるであろう、――予感のする――、親子喧嘩に巻き込まれるのだきゃゴメンだからな。

「あァんた、何食べてんのよ毎日？　冷蔵庫に何も無いじゃないの」
久しぶりねとか、元気だった？　ではない。
スーパーの袋を大量に抱え込んだパーマの女、――エミのお袋らしい――、の開口一番の台詞だった。エミに玄関を開けさせたあと水がぽたぽたと落ちる傘を傘置きに差した彼女は、何も言わずに上がりこんでビニールの食品を冷蔵庫に詰め込み始めた。勝手知った る我が家という感じである。まだ玄関先に居たエミは、そんな親の唐突な行動に気圧されたように固まってやがった。
俺は親子揃って言葉が足りねえ辺りにＤＮＡの神秘を感じてしまったが。
「ちょっと。タオルぐらい用意しなさいよ。母さんずぶ濡れでしょ」

不甲斐ない娘を持ったと言わんばかりに鼻息を荒げる母親に対して、「タオルくらい持ち歩いてよ……」と小さく呟いたエミは先ほどクローゼットに押し込んでいたタオルを取り出して放り投げた。それをキャッチした彼女の母親はざばざばと髪の毛を拭く。

そして、ふと気付いたように顔をしかめて低く唸った。

「また掃除の手を抜いたわね」

流石お袋さん、エミのことはお見通しらしい。しかし、その中途半端な見抜き方に俺は嫌な予感を覚えた。折角熟知しているはずの彼女の行動パターンが読み切れていない。

やべぇんじゃ？

そしてその予感は的中する事となる。どうも俺は勘がいい。

怒涛の如く繰り出されるダメ出しを前に、思考がショートしたエミは立ち竦んで逡巡した。

恐らくこの馬鹿女は久々に登場した親が痛烈に自分を攻撃してきたと思っているのだろう。

少し迷ったような素振りを見せたかと思ったら、悔しそうに唇をぎゅっと噛み締めて、意を決したように簡易テーブルに歩み寄るとバッグを引っ掴んで宣言したのだ。表情を隠して精一杯声をあげる。

「……私、今日人と会う約束があるから。ちょっと出てくる」

嘘つけ。

「うそ！？　待ちなさいよ、母さん置いてく気！？」

どんな意地が働いたのかは不明だが、行動力のない女が無駄にアクティブになった。

っていうか、大体お前今日は雨だぞ。万年引き籠りの癖して何してやがる。

俺のありがたい忠告と、母親の裏返った抗議の声。

二人の火に油な発言を無視して、ブーツを履いたエミは俺の栄養源の中に飛び出した。耳障りな音と共に玄関が閉まって、馬鹿女の足音が離れていく。

一瞬辺りが静まり返ったと思ったら、思い出したように雨音が増

した。
「母さん独り……？」
呆然としたお袋さんの声が、風船が急速にしぼんでいく様を思い起こさせて虚しい。張り切りすぎた後だけに尚更に。
――大丈夫だ、俺も居る。
柄にもなく同情を込めて慰めの言葉を吐いた。あんたの娘さんに俺も苦労させられてるんですよ、と。
ところがだ。俺の貴重な同情の横で、窓辺のベッドに腰を下ろしたお袋さんは「やれやれ疲れたわー」なんて唸りながら自分を労わって肩を叩き始めたのである。
マジで、聞いちゃいねえ。
しかも独り言も遺伝かよ。
このお袋さんと居ると、どうもデジャビュを見ているようで仕方ないんだが。
気のせいではなくその通りなんだと思ったが、水不足のためか普段のように色々突っ込んでいたら無性に疲労を感じてしまって、俺は黙り込んだ。大粒の雨に屋根が悲鳴をあげる音と、お袋さんが肩を叩く音が共演する。そういえばエミ以外の人間と二人っきりになるのは初めてだ。
薄らいでゆく意識の片隅でそれにしては新鮮味を感じないと考えた。
なんだか、眠い。うとうとしていると微かに遠くで「今のうちに掃除を始めるか」というお袋さんの声と、少しして掃除機の吸引音が響き始めた。
音がどんどん遠のいてゆく。そしてどれだけ眠っていたのだろうか。うっすらと焦点が定かになりかけたと思ったその瞬間、いきなり眼前に肉厚な手の平のアップが迫ってきた。
なんだ！？
疑問に思う間もなくお袋さんに掴まれた俺は、乱暴な浮遊感に襲われるままに持ち上げられた。グラグラと有り得ない角度で室内が

揺れる。それでも何とか冷静を保って、俺に空中ブランコをさせているお袋さんに視線を向けると彼女は目を細めて、少しでも値切ろうとする商人のような眼で俺を観察していた。
そして俺のその例えは、生憎と何も間違っていなかったのだ。
「もうダメね、これ」
お袋さんは俺を値踏みすると、そう結論付けた。
モウダメネモウダメネモウダメネ……。
――“もう駄目ね”
アァ！？
やっとその声が言葉に変換されて眩暈を感じた。気持ち悪り。
お袋さんの顔が壊れたテレビのようにぶれる。折角目が覚めたってのに、また意識が遠くなるような気がした。
落ち着け俺。落ち着いて考えろ。
今何て言いやがった？　こいつ。
……“もうダメね”？
確かに最近の俺は本調子じゃない。水分不足に上乗せするように冬が忍び寄ってきた結果、体力を消耗しちまって、一張羅の緑衣が色褪せてきている。だが、挨拶さえ完了していない俺はまだ生きていることすら認められていないんだ。駄目って、……んな馬鹿な話があって堪るかよ。
俺の異議申し立てに耳を貸すことなくお袋さんは、古ぼけた鉢を床に置いた。意志を持たぬ鉢は抵抗などしない、仮に意志があったとしても。少し埃が舞って一瞬だけ視界が遮られる。
お袋さんの膝頭から上を見ることが難しくなった。人間が周囲に影を落としてそびえ立つ様を見たのは初めてだ。こんなにも圧迫感を感じるものだっただろうか。
ただでさえ薄明かりで閉鎖的な室内が、更に狭苦しく思えた。
捨てられたら会えるかもしれない。まだ見たことのない月の婦人は、こんな感じでないと良い。
――俺も此処で終わりだ。

半ば投げ遣りになったその時だった。
また耳障りな音を立ててエミが戻ってきたのは。
「ただいま」
言ったのは申し訳程度。
びしょ濡れになった彼女は俺に目をくれるでもなくドタドタと床を揺らして、タオルを頭に被せながらベッドにひっくり返ってきた。
「土砂降り……」タオルを顔に移して疲れ果てたように一言。そんな彼女の行動にベッドサイドで呆れ返ったお袋さんは、思い出したように報告をした。
「あぁ、エミ。其処のサボテンもうダメだから、捨てるわよ」
まるでゴミ出しをする時のように。
気楽な言葉に切り捨てられたそれは、あまりに非現実的で。俺の話じゃないように思えた。
「んー？」
ベッドで放心していたエミは、お袋さんの台詞を聞き逃して上の空で訊き返す。
「だから、そのサボテンよ」
苛ついた母の声に、エミは煩わしそうにゆっくりとこちらを向いた。
意味が解らない。
そんな瞳で、一瞬俺の存在と正体を確認するように見つめる。エミがまともに俺に視線を向けたのはもしかするとそれが初めてだったのかもしれない。みすぼらしい緑衣だろ。自嘲気味に言う。
段々と母の言い分を理解してきたらしいエミは、弛緩していた表情筋を一気に強張らせた。何故だか、じわりとその瞳に涙が滲む。
「何言ってんの！　私のサボテンを、勝手に捨てないでよ！」
キィーンと心の隅を引っ掻かんばかりに響く、ヒステリックな声。
気弱なエミは今までこんな怒声を出したことがない。その剣幕には思わずお袋さんも身を縮めた。

そういう俺も事態の展開についていけない。
呆気に取られる俺たちを前に、顔を真っ赤に腫らしてエミはベッドの上に仁王立ちした。タオルが慌てて逃げ落ちる。
「デブリンだって死んだのよ！　これ以上、私から何を奪おうと言うの。勝手に押しかけてきたと思ったら、私の居ない間にサボテンを捨てる準備。もー、信じられない。さっさと出てってよ！」
２０代女性とは思えぬほどの見事なキレっぷり。
これまで俺を見たことすらなかったエミが感情的に啖呵を切っている様子は、驚きを通り越して圧巻そのものだった。
お袋さんは確認を取らずに俺を捨てようとした訳ではない。俺をゴミ扱いしたそのセンスの悪さには辟易するが、どう考えてもエミの怒りは勘違いによる暴走だ。
だが、エミは引き籠りの馬鹿女だ。正直人間の中でも会話する事を知らない、ろくでもない類に入るだろう。
会話が苦手。だからこそこれ程反抗した事が今までなかったのかもしれない。
急速な事態に対応するタイミングを見失って、俺に手を掛けた姿勢で一時停止したお袋さんは金魚みてえに口をぱくつかせるのみだった。剛毛の中心でエミの眉間に皺が寄る。
「出てって！」
「エミ……」
哀れにも、狼狽する母。
鬼の形相で娘に睨まれたお袋さんはその迫力に押されるように渋々靴を履く。
娘の生活状態を心配した訪問はおよそ二時間で終焉を迎えた。訳も分からないうちに王者サボテンも顔負けの仁王様に昇格したエミによって、狭苦しい世界から拒絶されて玄関から吐き出されたのだ。
哀れ。
哀れだが。
俺は内心安堵していた。

エミ親子の事情などこっちの知ったことじゃねえ。
何が何だか分からねえが、取り敢えず俺は延命したのだ。まだ、日陰様に生かしてもらえる可能性はある。

「で、生き延びたの。しぶといのよね、サボテンって」
身も凍るような室内と比べてお日様に守られた3階アパートのベランダはさぞかし暖かいのだろう。冬の到来を気にもせず、しきりに首を上下させるのは例のメス鳩だ。俺は寒いのを堪えてるってのにいけしゃあしゃあと抜かしやがる。
俺が生き延びたことを喜ぶでもなく、悲しむでもなく、まだ日陰様に排除されなかった事実を確認するかのように彼女は言った。まあ、下手に慰められるよりその方が心地良いんだが。
「大して環境が改善された訳じゃねえよ。うちの馬鹿女が悪戯に俺に興味を抱いただけだ。いつまで生きられるか」
「いやね、ちょっと元気になったと思ったらその口汚さだけは直ってないんだから。きっと天の日陰様がチャンスを下さったのよ、大事になさい」
普段雛鳥たちを世話していたせいだろう、メス鳩は自然と諭すような口調になっている。
「ところであの人間……、エミっていってたかしら？　彼女はずっとアンタに首ったけなんでし……」
「あー、分かった分かった。ガキらが待ってるぞ」
俺がうんざりしたように声をあげると彼女は器用になで肩をすくめて見せた。
「――仕方ないわね。またこのパターンで追い返されるの」
ガキの話を俺が始めたってことは、これ以上踏み込むなという警告でもあり会話終了の意思表示でもある。どうやら彼女もそこら辺のことに気付いてきたらしく、今では“ガキ”の二文字が出ると未練がましい素振りなど見せずに羽繕いを始めて飛び立つ準備をする。
「彼女の心を射止めるのよ」

カッチーン。
思わず効果音をあげちまうほど、心外な台詞を吐かれて俺の心はそれこそ瞬時に大量の反論を並べ立てた。要約すると俺はそんなにレベルの低いサボテンじゃねえって話だ。余程青春時代が懐かしいのか彼女は余計な誤解の声援を残しやがった。マジで余計なお世話だ。大体俺はサボテンで格式ある王者だぞ馬鹿野郎と胸中で悪態を吐く。
俺のブーイングは彼女に聴こえていないんだろうが。
言いたい放題言って満足したのだろう。強情にも俺達を閉じ込めるカーテンの向こう側から彼女は今日もそうやって窓内の住人をからかう世間話をして、蒼っぽい光が霞みがかる窓の奥へと去っていった。お日様が疲れやすい冬の、午後４時過ぎの光が世界の住人を励ますように柔らかい。
でもよ。
彼女の背中が小さな点になっていくのを眺めながら俺はそっと語りかけた。にしたって、お前の雛鳥はもう巣立ちをしているんだろ。未だにガキがいるような口振りで行動範囲を狭める口実作りやがって。わざわざこちらを騙してまで俺に青春を期待して遊ぶ暇があったら、新しい彼氏でも探していればいいものを。お前は天の日陰様に認められているのだから。
金魚の親爺といい、お前といい損な性格であると、そう思わずにはいられなかった。
そんな思考にとらわれて暫くメス鳩の人生を勝手に嘆いていると、相も変わらず薄暗い廊下の奥でカチリと遠慮気味に玄関ドアの鍵が開く音が響く。
「ただいま……」虚空に言葉を漂わせながらふらふらとエミが帰ってきて、仕事鞄を簡易テーブルに投げ出して放心したようにベッドにも身を投げる。お袋さんが帰ってからというものこの女は全くと言っていい程食事を摂ることもなく、冷蔵庫の中はすっからかんだってのに今日もスーパーの袋は持って帰っていない。

夕日も暮れかけた暗闇の中で這いつくばっているエミ。ナメクジみてぇだと思っていたら、彼女の瞳が俺の存在を確認した途端に灯りを燈した。そしてむくりと起き上がると、次第に水気が増してきたその瞳で俺にすがりつくように訴えてきた。

今日もか。

「私、何やってもダメなの。皆人徳があって引っ張り凧なのに私は派遣の依頼だって中々入らない。やっと手に入れた3つめの仕事で今までよりは経験だって積んでるはずなのに、新しい社員達の中で上司との交流の計り方が解らない。人間なんて胸の内に何を潜めてるか解らないでしょ？」

なにを思い出したのか、彼女はぐすんとすすり上げた。

「どうしたら良いと思う？　私は物覚えが悪くてミスばかり繰り返してる、また荒谷さんを苛つかせた。リュウジンボクが羨ましいよ、毎日ぼーっとしてるだけで許されるなら幸せなのに」

窓縁に頬杖をついてこれ見よがしに溜め息を零した。

そして、俺の名を呼んで植木鉢に触る。こいつはあのお袋さんの一件以来俺のことしか頭にないようで、仕事を早々に済ませると寄り道もせず真っ先にこの狭苦しい世界に閉じ籠るのを日課とするようになった。そして誰とも会わない。

昔から不健康な女だったが、今や病的なまでにガリガリに痩せ細って青白い茎のようになっちまってるエミ。お前は光合成が足りなさ過ぎる。サボテンでいうバイラスのような――、何かそういう病気に掛かってるんじゃねえだろうか？

「私が世界を小さくしている現況だってことは解ってるよ。でもどうしようも無いんだ、今まで何度もこの世界から抜け出そうとしてきたけど。それでもね、最近はこのまま独りでも良いと思ってる。私にはリュウジンボクが居るもの。ずっと彼氏が出来なくても誰も周りに居なくても、貴方は私の話を黙って受け止めてくれる王子様だからさ」

コケてしまった頬で微かに微笑みを象ってエミは静かに涙を落と

した。静寂に囲まれてふっと笑みを消すと何の躊躇いもなく針のように尖った俺の擦れた緑衣に指を滑らせる。その血色のない指先からツーッと血が滴り落ちて、そのうち何滴かが俺の衣服を紅に染めた。弱々しくも俺を撫でる彼女の利き手はあっという間に傷だらけになる。

馬鹿野郎。お前もメス鳩も何でこんなにオツムが弱いんだ。

俺が認められたいのは天の日陰様だ。俺はお前に認められたい訳じゃねえ。

今俺が逢いたいのは月の婦人で、別に色気のない勘違いな人間に好かれたいと思っていた訳じゃねえんだ。

お前は自分の世界を、その世界が内包する全てが否定されることを恐れているんだろ。だから急に俺を愛しく感じたんじゃないのか？

「水、持ってくるね」

血の滲む手に気付くこともなく俺が傍に居ることを確認した彼女は嬉しそうに笑みを漏らした。俺を生かすためにエミはベッドからゆっくりと身体を退けて人間の気配が絶たれ寂しげなキッチンへ向かう。流しから申し訳程度の水音が漏れた。

感覚が麻痺したのか本心ではそれを嬉しいと思う自分が異常だった。壊れている。

布団の空気が微かな吐息で揺れていた。泣き疲れたエミが海溝の眠りに落ちたのだろう。何処か落ち着かない心細げな横顔は、月光の慈愛が到達しない薄闇の中で俺の方を向いて一寸も動かなかった。痛々しいまでに紅かった指先は隠れていて伺えない。痛くねえのか。

俺の衣裳に刻まれた人間の刻印はエミによって拭われてはいたが、あの鮮明な光景は心の奥に貼りついたまま未だ払拭できずにいた。

全く不甲斐ない。俺が望んでいたのは天の日陰様への礼節であり、人間の女などに必要とされることなんて端から想定外だったのだ。なのに、何故。

この展開はどういうことだろうか。

例え窓辺が揺り籠となり、そして生物界の民となれずに此処を墓場としてたった一つの命が尽きたとしても。それでもその衝撃に独りで堪え抜く覚悟でいたはずの俺が、エミを必要としている？

――確かに最近の俺はこの馬鹿女に救われている。凍てつく冷気の中に放置されて、この見事な緑衣は原型を留めなくなっちまったけれど。何とか生き長らえる分の水や栄養は過分に与えられているし、恐らくこいつが居なかったら俺は不健康どころじゃない。あっさり死ぬのだ。

そして、この女も。

髪の間から覗く睫毛が彼女が呼吸をするたびに小さく揺らめくのを見つめながら思った。

もう俺が居ないと駄目なのかもしれない。

この狂った牢獄に圧迫された遣り切れない焦燥感に駆られて、俺の綻びた緑衣の部分は血液の温かみを感じている。悔しくて仕方ないことに、唯一俺を必要としているこの駄目女が、――俺は何よりも大事だった。

必要としているのは、俺の世話役としてなのかそれとも他に何かあるのか――、考えるのが馬鹿らしくなって俺は境目のわからない暗色の天井を振り仰いだ。

なんて要らねぇ感情。

月の婦人が一段と美しい夜なのだと何処かの渡り鳥たちが噂していたその日、エミはお日様が暮れても帰ってくることがなかった。

毎日真っ先に俺の元へ帰ってきていた癖に。見捨てられてのたれ死ぬんじゃないかという不安がよぎる。

ったく心変わりしたというなら、流石迷惑女だぜ。どういう思考回路してんだ、あいつ。

もしも彼女の身に……、という考えがなかったわけではない。それでも俺の嫌な予感はいらねえことに的中率が高いので心の片隅で考えることを拒絶していた。

もしも、もしも。
厳粛なツラをするカーテンが俺に重圧を掛けてきたが、軽いジャブで小馬鹿にしてやり返してやる。メキシコで鍛え上げた俺のパンチは半端じゃない。突き刺さるトゲの数々に反撃も出来ずにカーテンは立ち尽してやがった。
――今楽にしてやるよ。
とどめの一撃を繰り出してやろうとしたその時。
はばたきの音が聴覚に舞い降りて突如現実に引き戻された俺は、無傷で平然としたカーテンと向かい合う羽目になった。お陰で俺も元のボロボロ姿に戻る。
「ちょっとちょっと！」
俺が寝ているとでもと思ったのかメス鳩が大きく囀る。オバサン臭ぇヤツだ。
「うるせえな、起きてるよ。今良いとこだったのに」
どうせまた口の利き方を注意されるんだろうと思いながらも、ついいつもようにつっけんどんに言うと、メス鳩は早口に何かをまくしたてた。
「何を言うの、近くの歩道でヒッキー女が倒れてたのよ！」
「……は？　っていうかお前、いつから夜行性になった」
俺の絶妙なツッコミに機嫌を損ねたのかメス鳩の声が極限まで震えた。
「だからヒッキーが！」
「……なんだよヒッキーって」
気まずい沈黙が降りる。俺が何かしたか？
信じられないと言いたげにメス鳩はくちばしを開いた。
「――アンタ、ヒッキーって言葉も知らないの」
「知らねえよ」
悪かったな、と低く唸る。噂好きのお前とは違ってこちとら囚われの身だ。
「……引き籠もりのことよ」

メス鳩の呟きに一瞬頭が真っ白になった。――引き籠もり女が倒れてた？

「……御冗談を」

呆然とした俺の声が、他人事を装って白々しく空中に拡散していく。

「もう、馬鹿」

白々しい残響が消えるのを待ちきれずに乱暴な動きでメス鳩は飛び立った。

嫌な予感がまた当たっちまった……。

取り残された俺はどうしようもなくカーテンを見つめるばかりだった。――倒れてたヒッキー女＝引き籠もり＝エミ？

遅れてやってきた焦りが俺を押し潰さんばかりに追い立てていく。てめぇは非力だよと、眼前を阻む重苦しいカーテンが追い打ちを掛けた。畜生。

それはもう目まぐるしく思考を回転させた。どうやって彼女を助けだせるか。

しかし何度考えても至る結論は俺が役立たずだという要らねえ事実だけだ。自分の無力加減が救いようもなく、息も吐けぬほどに苦しい。なにも手が出せない歯痒い状況に俺は柄にもなく焦っていた。

こんなんだから俺は生物界にも認められねえ。サボテンなんてろくなもんじゃない。

――誰が王子様だって？

笑っちまうぜと己を蔑む俺を、カーテンの野郎は無言の失笑で見据えた。重力が倍増したように暗がりを広げる部屋に寒気がする。

こんな凍える夜に、エミはたった独りで大丈夫なのか？　無事でいてくれる保障はないのだ。

……どうか陰様に救われてくれ。挨拶の一つもしない罰当たりな俺たちだけど。

秒針が機械的にコチコチと鳴り、焦る心を置いて無慈悲に時間が過ぎていく。後から後から迫る音に俺は追い立てられていた。狂気

のような時がどれだけ経ったのかわからない。緑衣が痛い。
一体俺が何をしたってんだ。なあ日陰様、唯一俺を必要としてくれた存在を奪わないでくれよ。
――お願いだ。
もう俺は消える。足掻くのはやめるからよ。
ひきつけを起こしたような空間がその願いを聴き遂げてくれたのだろうか。暫くして暗色の粒子の奥から玄関がようやく音をあげて俺の気持ちを早らせた。
エミ……！
訃報を持った大家や他の人間ではないかという最悪の予想が首をもたげる。
しかし覗いたのはあの剛毛の前髪。エミだ。薄汚れた姿を滑り込ませた彼女は扉を閉めるとフラフラとベッドに歩み寄り倒れこんだ。俺の緑衣を確認してうっすらと目尻を揺らすと、赤く腫れあがった頬に手を置いてエミはうわごとのように呟く。
「変な鳩に突かれた……」
あいつか。
一気に力が抜ける。どうやら飛び立ってしまったメス鳩がエミをせっついてくれたらしいと思ったその瞬間、ベランダの方で僅かに物音がした。ばさりと羽を揺らして、これは貸しにしておくわと彼女が言ったようだった。心配になって見届けにきたのだろう。お人好し過ぎる。
だが今回ばかりはその性格がありがたかった。
そうホッと安堵していると、隣からゼェゼェとした呼吸が聴こえてきた。心なしか上気した顔の彼女があっという間に眠りに就いている。眉間に皺を寄せてうなされていた。
――大丈夫なのか、こいつ。
どうして倒れていたのか、どうしてこれ程苦しそうな寝息なのか。必死に答えを探る俺の心を以前ＴＶから吐き出された“インフルエンザ”という単語が掠めた。静まった心が騒ぎだす。

もしそうなら。
もしそうなら、やはり天は手厳しい。
こいつの症状に気付いて看病をしてくれる人間など居ない。エミ自身も病院に行くか怪しい。
日陰様に挨拶をしたことがない奴は誰もこの異常事態に気付くことなどないのだ。
クソッ！
人間の女なんてだからまっぴらなんだ。
日常の異変と亀裂が見えない生物。天の日陰様を知らない罰当たりな種族。
今宵は月の婦人が綺麗な夜だってのに。カーテン一枚隔てたこちら側ではその存在を知らないエミが浅い呼吸を繰り返している。俺は何故この馬鹿女が大切なのだろう。
俺がしなくてはならないことは、本来望んでいるのは月の婦人との逢瀬のはずだった。

サボテンってのは寒さに弱い。
だから枯れたり病気になったりしないように冬眠に入る。――普通は。そうやって体内の栄養分を節約する。
だけど昨夜。天の日陰様に懇願したその瞬間から、俺にはそんな悠長な時間などなくなった。どうせ観賞用だと言えばそれまでだったが、半分眠った状態で彼女の弱音を聞くつもりはなかったし、何より俺は月の婦人を選んでいた。
婦人と挨拶をかわすにはこの憎らしいカーテンの野郎をぶっ倒さなければならない。それには弱った体内の栄養分のすべてを“成長”に費やして、背丈の増した俺の先端で夕刻のお日様を覆い尽くしたカーテンを少しずつまくる必要がある。
力尽きて死ぬか、生き残って挨拶を遂げるか一か八かの大勝負だった。
「力尽きて死ぬか、挨拶を遂げて死ぬか、でしょ」

「あ？」
「解っているくせに」
すべてお見通しだわと言うように彼女はガラス越しに近寄ってきた。
俺はこいつの嘘を追求したことがねえのに、どうやらこいつは探偵ぶって余計な名推理をぶちかましてくれるらしい。
「アンタがもし、お陰さまへの挨拶を達成できたとして。逢瀬ができるのはヒッキー女も同じことなんでしょう？　婦人の美しさに心酔した生物は、ただでさえ三日三晩“夢の世界に解き放たれる”と言われているの」
遠くの空で烏同士の言い争う濁声が重なり合って転がった。メス鳩は一息吐いて呟く。
「ヒッキー女が婦人に出会ったら最後、アンタなんて忘れてしまうでしょうに」
「……だろーな」
「――頭の弱そうな娘だもの。彼女が月の婦人の存在を知ったとして、“夢の世界に解き放たれ”でもしたら、見捨てられて世界から消えるのはアンタよ」
「人間の女に認められるなんて、柄じゃねえよ」
メス鳩のシルエットが膨張して薄暗い街並と空の一部が得体の知れない夜に飲み込まれていく。
漂う俺の言葉は唯一異質だ。
あの趣味の悪ぃ女はまだ帰ってきていない。病院で遅いのか、仕事で遅いのかは不明だった。
「私が――私が貸した借りは。死んだら返せないでしょう」
「……借りは返さない主義なんだよ。俺は婦人を拝んでみせる」
取りつく島のない俺の言い草。
食い下がろうとしていた彼女は、次第に肩を落としていって觜をつぐんだ。
「ガキが待ってるんじゃねえか？」

畳み掛けるように言うと、一瞬彼女はガキなど巣立ってしまったという事実を話そうとして――諦めたように鳴き声を落とした。
「――そうね」
建造物に紛れて沈んだ顔のお日様が地平線に姿を消す。カーテン越しで暗闇に滲むその声に触れた瞬間、俺は自分の言った台詞に後悔を覚えたが、今更何も取り繕う気もおきずに黙っていた。
羽繕いを始めていたメス鳩はそれでもう一度だけ顔をあげて訊く。
「そんなにしてまで婦人に逢わせたい？」
質問への返事を待たずに、メス鳩は折り畳んでいた羽を広げた。
「――光合成が出来ねえんだよ。下を向いてるだけじゃな」
さようなら。
そう言われた気がした。
俺の一言を合図にメス鳩は飛び立つ。突き放すようなはばたきの音に、俺は初めてアルコールという液体すがりたくなった。

狂ってると思うのだ。俺しか目に入らないなんて。ヤバいだろ？
絶対。
だから、俺はこの心地良い居場所から解放されるべきだ。メス鳩が姿を消してから約2週間、俺は朦朧とした意識のなかで背伸びをし続けていた。
エミの様態は相変わらず不調で、派遣先でクビにされてからはずっと俺の横で寝込んでいる。息苦しそうに布団にくるまり、彼女は俺に水を与えるばかりで自分の食事を摂らなかった。
メス鳩に最後の質問をされたあの時と同じ時間帯。同じ窓際。
彼女の面影はあまり思い出したくなかったが、代わり映えのしない俺の周囲がそれを許さない。
なにか違いがあるとすれば、薄く細やかな日差しがカーテンから少し、疎らに漏れるようになったことだろう。
お陰で俺の眼前は半分以上、カーテン野郎の布地が覆い被さって

真っ暗だった。頭部は有り得ないほどに重く、身体中がズキズキと軋んでいた。
少しでも。上へ、上へ。
干からびた緑衣を見ないようにしてそれだけを考えた。集中して雑念を払っていると、ノイズに紛れて辛うじてメロディーと取れる音が控えめに部屋の空気を掠めるのを聴いた。

――私を月へ飛ばして。

いつからか少音量で掛けっぱなしだったラジオは、先程から“Ｆｌｙ Ｍｅ Ｔｏ Ｔｈｅ Ｍｏｏｎ．”と紹介された曲をひっそりと放送している。
確かメス鳩が言っていた。何処でだか忘れたけれど、静かに月を形取る美しい音色を一度だけ聴いたことがある、と。途切れがちなこの曲がそれなのかもしれない。女々しい曲だった。
ときたま烏の声と、エミの咳き込みが混ざる。視界の隅に意識をやれば、彼女の剛毛が見える。この生活も長くはない。
……あと少しで解放されるんだ。
後ろ髪引く思考を中断させる。けじめをつけろ。
極限まで増した痛みを振り払い、俺は月の婦人に逢うために渾身の力で背伸びをした。その時。

違和感を感じる間もなく、鈍い衝撃音がばきりと嫌な音を立てた。何処から出たのかわからない。

そう思った瞬間だった。俺の暗転した景色は一瞬にして傾く。
どさりと小さな音を確認してやっと何が起きたのか理解した。
折れた。
――俺が。

唐突だった。
視界が霞んで真っ白に塗りつぶされる。限界メーターを振り切り、感覚を吹っ飛ばされて痛みさえ感じることが出来なかった。
息を吸えてないのかもしれない。身体機能を失った引き替えに聴覚だけが嫌にはっきりして、ノイズと布団のずれる音が鼓膜に残る。
このまま。何も出来ずに終わるのだろうか。
そんな不安が心を過ぎった。
「……あ」
エミがごそごそと起きだす気配。後ろの方から感じたそれをきっかけに、俺の視覚が少しずつ蘇ってきた。
何の考えもなくエミの方へ視線をやると、逃亡していた色彩が徐々に戻ってくる。
はっきりと見えた。こんなに見えて良いのかというほど。
半開きになった彼女の口。その瞳は次第に意志を持った光を帯び、ある一点を見つめていた。
――俺ではない。やけに眩しいその場所を。
力尽きた身体を引き摺るように、ぎこちない動作でエミの見つめる先を辿る。其処には見たこともない景色がでかでかと広がっていた。
信じられなかった。窓の5分の1が明るい。趣味の悪い光ではなく、染み渡るような明るさ――カーテンが僅かに押しのけられていたのだ。折れた、俺の上半身が布地を揺らしている。ともすれば眠りに就いてしまいそうに弱った自分を叱りつけ、窓の外を食い入るように見入った。
ＴＶでしか見たことのなかった建物。ビルと、アパートが窓辺の縁の上で軒を連ねている。トーンを抑えたように寄り添う建物のなかに規則的な街路樹が彩りを付け足していた。人間の住む街。俺には鮮明過ぎる場所。
その上空に、朱の透明色が優しく降り積もっている。……これが空なのか。人間に遠慮するように、それでも確かな存在感を保って。

居心地のよさそうな朱色の布団に収まって神々しい姿を沈めているのは、お日様だった。――俺の視界をさっきまで真っ白にしちまっていた当人。

就寝の準備で忙しげな彼に向かって沢山の鳥達がおやすみなさい、と話し掛けている。日没はもっと寂しいものだと、ずっと勘違いしていたのだが。

こんな世界があったのか？　俺の知らないところに。土色の髪の女や、エミのお袋さんや、メス鳩を包み込む切なくも懐かしい空間が。

今まで鈍っていた神経が眩しさに突然痛みを訴えてきて、俺は視線を逸らした。……限界だ。疲れたように俺の世界が青白む。

あの曲は終わったのだろうか？　聴覚も馬鹿になっていて、判断がつかなかった。

ついに無音と化した俺の前で、じっと動かずにただひたすら窓の外に吸い込まれていたエミが、ふっと手を伸ばした。伸びた手は、緑衣を越えてカーテンに触れる。

勢い良く開かれたカーテン。

その果てに彼女は居た。慎ましく綿雲の衣を身に纏って、まるく微笑む安らかな彼女。世界の生物を刺激することなく、そっと佇む月の婦人が、エミの手の平の延長線上で俺たち――いや、エミを見守っている。

今にも届きそうなすぐ其処に、俺の望んだ彼女は居る。

瞳いっぱいに月の婦人を映したエミは、ほーっと吐息を漏らしたようだった。

「綺麗……」

そんな感じの一言を落としたのだと思う。小さな雫を伝わせて、彼女は夢の世界に解き放たれた。

そうだ。俺が居なくても暮らしていければそれで良い。

残った力で薄く笑うと人間を真似て、溜息を吐いてみる。あまりエコロジーとは言えない酸素不足のちっぽけな息で月の婦人を滲ま

せると、薄れゆく意識のなかで俺は最後の挨拶をした。
――月の砂漠に俺は行くからよ。
外の世界も捨てたもんじゃないだろ？　エミ。

第一話：緑衣の王様（後書き）

『Ｆｌｙ　Ｍｅ　Ｔｏ　Ｔｈｅ　Ｍｏｏｎ』

私を月へ連れて行って。
木星や火星にはどんな春があるのか、私に見せて欲しいの。・・・・

（中略）

・・・　私にとってあなただけ。
あなただけがかけがえのない、
大切で尊いもの。
言い換えればそう、愛してるということ。

こんにちは。綾無雲井です。
緑衣の王様、最後までお付き合い頂きありがとう御座いました。
上記の歌詞は、原文の意訳です。
この歌詞を知ったとき、エミの心を映したような曲だと思いました。
良く言えば可愛らしい。悪く言えばついつい甘えに走ってしまう引き籠り女と、それを罵倒しているけれども結局振り回されてしまっているサボテン。
それに巻き込まれてしまったメス鳩達の物語は一時終わりを迎えます。
（第二話で、メス鳩を中心にお話は始まります）

ところで、皆さんは“サボテン女”という言葉をご存知でしょうか？
無知な私は緑衣の王様を執筆し始めてから知ったのですが、『サボテンさえ枯らす女。サボテンのように劣悪な環境でも生活する事の

できる女。』の事を示す言葉なんですね。
ただ、サボテンのように劣悪な環境でも～と言っても、実はサボテンだって繊細です。
冬の寒さには弱いですし、窓際に置き過ぎると健康を害する事もある。
それでも、知識を持って大事に育てれば、何年でも傍に居てくれるのがサボテンであります。
（サボテンに関する資料を読み進めるうちに、彼の虜になってしまった私）
そんな一人暮らしのパートナーと、私が所属している作家サークルのお題『解放』が出会って、今回の第一話が生まれました。

楽しんで頂けたなら幸いです。
感想や、批評など、今後の執筆の糧となりますので、頂けましたら有頂天になります。
それでは、また今度。他のお話で。
≪２００６年９月８日、自宅にて≫

第二話：羽衣の奥様（前書き）

この作品は『緑衣の王様』シリーズの第二話にあたります。
一話完結形式なのでこちらからご覧になっても支障ありませんが、
このシリーズが初めてで、読んでみてもよいよと仰ってくださる方
は、宜しければ第一話『緑衣の王様』からお手にどうぞ。

それでは。
読者の皆様に、ささやかな何かを届けられますように――

第二話：羽衣の奥様

緑衣の王様が死んだ。
原因は、……衰弱死。
電柱下にある歩道の人影ふたつを見下ろしながら、彼女はそんな言葉を思い浮べた。暖かな季節を予感させる、初々しい風が羽を抜ける。その風に乗って届いたのは小さな声だ。
「母さんの言う通り、サボテンは捨てることにしたよ。ほら、もう焦茶く変色しちゃって」
「あら本当ね。――やっぱり、ダメだったでしょう？」
「……うん。流石母さんだよね。私も感情的になり過ぎてた」
声の主、ヒッキー女は不器用に微笑んで、腐敗したサボテンの入ったゴミ袋を見せた。瞬きをする刹那、その瞳は寂しげな翳(かげ)りを覗かせたように見えたが、それはほんの少しの間のこと。すぐに翳りは消えていた。
「昼ご飯何か食べに行く？」
母さんと呼ばれた女性の言葉に、ヒッキー女はひとつ頷く。ゴミ袋を捨てると、既に歩きだしていた母を小走りで追っていった。
それを見届けたメス鳩は、虚空に身を踊らせる。
空圧の増した気流を羽ばたき数回でさらりと受け流し、ご無沙汰していたベランダへ滑翔。
日当たりの良いベランダの上に放置された、小さな銀の紙に狙いをつけて急降下する。無駄なく降り立つことに成功した彼女は、広げた翼を仕舞いこんで春の知らせをさえずった。空に吸い込まれる声は伸びやかだ。
一通り歌ったところで、足元の銀の紙を突いて穴を開けてみる。バランスを崩して倒れないように気を付けながら、薄い紙をついばみ破った。
それをスタートにリズミカルに動く嘴(くちばし)。その先端が勢い良く紙に

刺さったとき、其処からなんとも形容しがたい音が鳴った。彼女はくるくる笑って羽をばたつかせると、ひときわソプラノの声をあげたのだ。

「しぶといのよね、サボテンって！」

＊　＊　＊　＊

少しの沈黙。カーテンの影の向こうで、サボテンは自らの意志を吐き出した。

「――光合成が出来ねえんだよ。下を向いてるだけじゃな」

その一言はメス鳩の心に深く刺さった。彼の決意は揺るぎないのだろう。重い空気を振り払ってしまおうというように羽ばたいたメス鳩は、夜の充満していく虚空に力いっぱい身を投げる。サボテンが切望し続けた月の婦人が今夜もこの町を見守っている。遠ざかる窓明かり。

彼はきっと。

自分を窮地に追いやることで、いつも小うるさくする鳩をも旅立たせようとしているのだと、メス鳩はそんな推測に囚われていた。彼を現実の逃げ場にしてはいけない。サボテンが命を尽きさせようとしているのならば、その時に立ち会おうとするほどメス鳩は自分を図々しい奴にするつもりはなかった。

一心不乱に飛んでゆくと、小さな垣根の中にとてもこじんまりとした庭が見えてくる。ほっそりとしたけやきに丁度良い枝の絡まり。自分のささやかな寝床に身を投じようとしたその瞬間に、ふとメス鳩の視界に緑衣の裾が過ぎったような感覚に襲われる。

リュウジンボク。

考える間もなく、羽ばたきを切りかえして碧の光る歩道に舞い降りた。其処には緑衣の――、見事に美しい碧の羽衣を纏った小鳥が

一羽、紙くずのように転がって落ちていた。
「アナタ、大丈夫っ？」
慌てたメス鳩は初々しい煌きに駆け寄ってその頼りない身体を揺さぶったが、ぬいぐるみのような容易さで小鳥は転がってしまう。コンクリートと同化した冷たさに息を飲むしかなかった。血が流れている。碧と、赤の鮮明さに目が焼ける気がして、メス鳩は思わず目を瞑(つむ)った。命が消えた。
烏(からす)だろうか。誰も気付かなかったのだろうか。――月の婦人はご覧になっていなかったのだろうか。なぜ？
「すぐ近くだから。暖かいところへ行きましょうね」
そっと話しかけると、小さな緑衣をできるだけ傷付けないように鉤爪で包み込む。寝床の家のおばあさんは、この小鳥を見つけたら必ずお墓を作ってくれるだろうと彼女は思った。さっきよりも慎重な飛行を始める。
また、闇に灰色の羽衣が溶けていく。彼女の灰色を強調させるように、半分に欠けた月の婦人は綺麗だった。

「あらあらあら」
おばあさんは瞬きすると、もう一度悲しそうな瞳で「あらあら……」と小さく繰り返した。
餌付けされた小鳥たちが知らぬ顔で朝の囀りをしている。緑衣の小鳥に寄り添うメス鳩を暫く見つめたおばあさんは、ゆっくりとかぶりを振って「カラス？」とだけ言った。足の付け根が痛んだ気がしたが、とんとん、とせわしなく身体を弾ませてメス鳩は返事をする。
「そうよね。まずはこの子の寝床を作ってあげないとね」
室内から柔らかそうな葉を何枚か摘みとってきて、それを小さな緑衣に羽織らせた。湿った土の寝床へ静かに横たえる。
今にも愛らしく鳴きだして羽を広げそうな小鳥の様子に、自分の

子鳥(ことり)たちの雛鳥時代を重ねてしまったメス鳩は、「おやすみ」とだけ呟くと、蒼が広がったお日様の世界へ身を翻した。本日快晴。お日様は冬などものともしない。

収穫日和だ、とメス鳩は思った。

なんだかお腹の虫が疼く。

海の向こうの名前を持った、おどけた赤毛が待ち受けているお店が見えた。得意の悩殺スマイルは、下手な番犬よりも迫力がある。それにビビる子供もいるのだが、そんな赤と黄色の縞模様にお構いなく、何かのバーゲンのごとく鳩の集団は群がっていた。よく晴れた日は、外のテラスで人間が軽食を取る。捕まえるのに手間のかかる虫などと比べれば、雨のように降ってくる恰好のご馳走だった。

「メシー！　ムシー！」

「ムシじゃないわ、ポテトっていうの！」

「ポテシ？」

ＢＧＭはマーチかラップか。鳩たちは騒がしく首を上下させながら、歩きまわる。出遅れたメス鳩は大きく旋回して、スタンドパラソルに止まると、軽快に鳴いた。胸毛を膨らませて１分間の空上ライヴでパフォーマンスを行う。それを続けていると、先程までおもちゃを弄くりまわしていた少年が「あっ」と声を上げた。

「すげぇ、あいつ片足？」

「あ。知らなかった？　よく此処に来るんだよ。名物、名物」

「へぇ～。ポテト、食うかな？」

それをきっかけに辺りの注目が隻脚のメス鳩に集まり、ちらほらと食べ物を投げる者が出てくる。興味津々な少年に向かってくるっと喉を鳴らすと、メス鳩は器用にご馳走を空中キャッチしていった。ポテトで調子に乗ったお客らは、パンくずや肉の破片まで投げていく。鳩たちもその様子に段々とざわつき始め、なかでも立派な虹色の胸毛を誇った鳩が彼女に詰め寄った。

「おい、片足。そのポテシは俺らのだ！」

「もう、落ち着きなさいな。このフライドポテトは人間のものよ。

噂では、お店にお金というものを渡して、引き換えに食べ物をもらっているらしいけど」
「……そうじゃなくて！」
片足の癖になんでこんなに飯もらってるんだよ。
ぶつぶつと煮え切らないように呟く。不自然な静けさが朝と昼の中間に落ちたが、チキンを飲み込んだメス鳩は苦笑して言った。
「日陰様（ひかげさま）は、誰かの思うように平等でもないけれど。だからこそ、私たちハトはチキンにならないように、頭を使わないとね」
ハトが平等じゃないから、チキン？
鳩たちはそろって小首を傾げた。まるで休日に行われる、集団ラジオ体操だ。
「あらいやだ。私のジョークがウケるのは、あの縞模様にだけ？」
赤毛は相変わらずニカニカ笑っていた。
毒舌のツッコミ名人が居ないとねぇ、と彼女はぽつり弱音を漏らした。

大抵の鳩はどこか少し抜けている。
だから彼らの方から距離を置いてくるのはある意味当然の原理なのかもしれない。メス鳩は彼らを恨むつもりはなかったが、それは相手を責めることができない分やはりなんだかきつかった。
あの大きな翼に襲われてから常時、烏色の空洞に閉じ込められている感覚が傍らにはあった。烏の漆黒が充満するトンネルの中にいる。日照時間であればあるほど狭まって彼女を締めつけ、夜が来れば世界全体に広がってしまう動くトンネル。月の婦人がぽっかりと浮かんでいるときだけ、出口が見えた気がしたが、メス鳩がどんなに力いっぱい羽ばたいても出口の向こう――外の世界には届かないのである。
サボテンから離れたことを、わずかに後悔した。
空腹を満たしてしまえばもう気を紛らわせる術はない。

「あーぁ！」
行き止まりはどこにあるのだろう。切れ目なく続く青空には、交通渋滞なんて存在しない。いたずらに吹きすさぶ風を受けながら、メス鳩は空を滑った。よたよたと蛇行する電線や木々のある住宅街は他の鳥の棲み処になっていることも多い。町並みを鳥瞰可能な高度を極力保っていく。純度の高い冬の疾風を浴びて、そういえば愛用の巣の枝が何本か吹き散ってボロボロになっていたことを思い出した。改装どきかもしれない。
「おいおい。こんなとこで珍しいな」
懐かしい声が下方から追いかけてきた。折角気流に乗ってきたところだったのにと思いつつも、元来お喋り癖のある嘴が寂しくなってきていたのも事実。仕方無しに高度を落として萎れた電線の一本に止まると、「気分転換にね」と答えながら声の主を振り返る。
「アナタは？」
「俺かあ。そりゃあ、嫁探し」
かつての旦那は早すぎるほどの即答を返すと、視線を仰がせた。思いつきで発せられた言葉は先っぽで希薄に四散する。大柄なその姿を確認すると、飽きないわねーとメス鳩は小さく肩をすくめてみせる。
「一年中、ナンパして回ってるでしょう」
「それが俺の天職だからねえ。飛び方が綺麗で、巣作りの得意な空の申し娘なんていたら申し分ないよ。――そっちは？」
「フィアンセのことなら、居ないわよ」
「飛行がまだアレだもんなぁ。ふらついてたよ、さっき見てたら多少。速度出しすぎだと思う。だから、……もし、」会話のテンポを落としたのは心配だからなのか、メス鳩の足に視線を投げて、至極真面目に彼は続けた。「子鳥が欲しいようなら、いつでも俺を呼んでくれて良いから」
乾いた打撃音が響いた。見事なクリーンヒット。目を瞬かせる彼の頬は、メス鳩の翼の餌食になっていた。

「……冗談なのに」
「私もよ」
彼は目をしょぼしょぼさせた。君、俺でストレス発散させるよねー、などとぼやいている。鳩たちが同じ相手に求婚しないのはできるだけ多くの可能性として、日陰様の下に命を産み落とすため。彼は掟破りの台詞を飄々と言ってのけたのだ。
「ねえ、あの子たちは元気？」
「さあなあ、俺、ずっと会ってないし」
自分の子鳥に興味がないのか、どこ吹く風で眩しそうに目を細めると、「まあ、頑張れよ」と彼は言った。
よくわからない。頑張れって？
メス鳩は首を傾げたが、彼は気持ち良さそうに風を受けて笑っているだけだった。

何十羽もの鳥が目睫（もくしょう）を横切り、何機かの人工翼が空に影を落としていく。どれくらい、それを眺めていたのだろうか。飛行をやめた身体で羽毛が冷え始め、オレンジに浸かった町並にお日様が傾いてくる。彼女にとって無言の時間が苦にならない数少ない相手、前夫と電線で涼んでいた。心地よいその沈黙を破ったのは彼の方だ。
「今日さ、君を探してる雌鳥に会ったよ。随分取り乱していた」
「……取り乱して？　まあ、誰かしら」
「君の近所に住んでいるそうだ。どうしても“片足さん”に伝えたいことがあるって僕に言ってきたんだけど、彼女はどうやら僕が君の夫だと誤解しているんだろうね。
棲み処の場所は訊いておいたから、今晩月の婦人が現われる頃に会いに行ってやってくれ」
「わかったけど、アナタそれが用件で声を掛けてきたんじゃないの？　本題に入るのが遅いわ」
メス鳩は呆れ顔になった。風を叩き落とすように忙しなく尻尾を

揺らすと、電線が軋みながら泳ぐ。
「落ち着いて聞けた方がいいと思ったから。話の内容的にね」
「――どういうこと？」
その問いを視野に入れるのを拒む素振りで彼は小さな目を更に細めると、首を振って「僕からは話せない」と口を閉ざしてしまった。
「僕はもう帰らないと」
風の匂いが変わって、急速に冷え込んできていた。辺りは翳りつつあり、夕刻を知らせるアナウンスは黒鳥の童謡で町を覆った。
――烏と一緒に帰りましょ。
あの色が迫る。

強風。来るのではないかと予測してはいたが、これほどとは思わなかった。残った僅かばかりの葉っぱを吹き飛ばしてしまう勢いで荒れ狂っている。
危険だ。
こういった時、片足のみが突風を受ける。おかげでバランスを崩さないように極力折り畳まなければならなかった。一瞬先には気分を変える気流を読み、左右のバランスを取ってそれに乗ることに集中した。失敗して枝やガラス窓に叩きつけられでもしたら……死活問題だ。ときたま襲ってくる枯葉を避ける。刹那、メス鳩は比重を右に移した。直後に風向きが変わる。
雲の激流のなか日陰様が揺らめいている。視界の隅にそれを感じつつも、メス鳩は闇に目を凝らす。全神経の感覚を研ぎ澄ませた。
恐らくあの藤棚の角を曲がれば、雌鳥の家だ。
刺すような冷風に身を縮めそうになるのを堪えながら、メス鳩は角を曲がる。
――1、2、3、……曲がってから4本目の樹。あれだ。
最後まで気は抜けない。足を突っ張って枝に止まる時こそ、緊張が高まる。バランスが悪いのだ。暴風が弱まった一瞬の隙をついて

舞い降りた。
常緑樹がごうごう吠えるなか声を張り上げる。
「御免下さいな！」
暴れる枝葉に見通しが利かないほどの状況だったが、頭上で何かが煌めいたのがわかった。
――緑衣の小鳥。
メス鳩は自分の目を疑った。今日別れたばかりの相手が、近づいてくる。
「片足さんですね？」緑衣の小鳥が喋った。夢の中にいるようだった。メス鳩はゆっくりと頷く。「あの子の母です」
叫んだその声は、微かに震えて風に攫われた。
「――お母様？」
緑衣の小鳥にそっくりだった。雌鳥が傍らに来てくれたため、普段のボリュームでメス鳩は訊き返すことができた。あの小鳥の面影がある、聡明そうな顔立ちだ。
「ええ。あの子、昨日の朝突然姿を消して……。ずっと、ずっと探していたんです。そうしたら、片足さんがあの子と一緒にいらしたとの噂を聞いて」
そこまで一気にまくしたてると、母鳥は一息深呼吸をして、言葉を慎重に刻む。
「あの……、大丈夫ですよね？　あの子」
死んだんですか、とは訊かなかった。大丈夫ですよねと言った母鳥の瞳は、肯定以外の返事を拒絶するように震えていた。もしかすると返事を聞きたくないのかもしれない。
しかし、望んでいる答えを返してあげることはできないのだ。嘘をついてもいつかは真実を知る。借りは返さない主義だと言ったサボテンのことを思い出した。メス鳩は胸が張り裂けそうになるのを感じながら、母鳥を見つめた。
「私が見つけたときには、もう」
それから先は続けられなかった。母鳥は顔を伏せると、何度も何

度も首を振り「なんで、あの子が」を繰り返した。その光景に既視感を覚える。デジャヴのように迫るトンネルに息ができない。浅い呼吸に追い詰められ、とっさにメス鳩は叫んだ。

「私も……！」

びくりと。

母鳥は首をもたげる。

「私も子鳥を亡くしたんです！　烏に襲われて――助けられなかった」

その足……。

母鳥が泣き腫らした瞳を呆然とさせて呟くのがわかって、無理矢理微笑みを作るとメス鳩は続ける。

「やんちゃな子でしたから、烏を怒らせてしまったんですよね。私の両足も両翼も、なんでも持っていってくれて良かったのに。選ばれたのはあの子でした」

チキンナゲット。それを見ると必ず思い出した。

子鳥たちの好物を手に入れるのに時間が掛かり、帰りが遅くなってしまったその日。巣立ちの練習をしていた二羽の子鳥は冒険心をもって少々遠出した。不運だったのは、不器用に羽を動かしていた子鳥のいっぽうが力尽きた場所が――烏の巣の真上だったということ。そしてその烏は子育て中だったということ。前夫が、散歩中だったということ。

襲われている我が子に気付いたメス鳩は、ナゲットを捨てて立ち向かう。

それは、時既に遅かった。

烏の大翼に覆われる。子鳥を奪われ、片足を奪われ、すべては真っ暗になった。もうダメだと思ったとき、烏はメス鳩を素通りした。

背に捕らえた獲物はナゲットだった。

それ以来だ。メス鳩の心は烏色のトンネルに閉じ込められたまま、そこから抜け出せずにいる。

「悔しかったですよ。母親なんて無力だと思いました。……でも、他の子鳥の手前落ち込んでばかりもいられませんでしょ。奥様は、……他にお子様は？」

「……いえ、あの子だけです」

生気の失せた瞳でうわ言のように母鳥は呟いた。

自分がこれから紡ぐ言葉はどんなに理不尽に響くだろう、とメス鳩は思った。母鳥をトンネルの住人にしてしまうかもしれない、残酷で無責任な諸刃の剣。からからに乾いた喉に夜露を含み、嘴を開く。

「じゃあ、新しい命をお産みになって。天の日陰様のもとで、もう二度と見失わないくらい鮮やかな、碧衣の小鳥を」

前夫の心遣いがありがたかった。母鳥より先に半狂乱になってしまうことなく、なんとか平静を保ってメス鳩は言った。今、此処に必要なのは静寂だ。小さな母鳥の周りで暴れ回る木葉の無遠慮さに腹が立った。存在を認めてくれるだけじゃ意味がない。月の婦人がもう二度と彼女達を見捨てないことを願った。

――はい。

あっという間に掻き消えてしまいそうなか細い声で母鳥は応え、むせび鳴く。

「明日、お墓にお連れします」

見上げれば枝の間に母鳥の巣が覗けた。一羽で住むには大きすぎる巣だった。

天の日陰様。私は大きな過ちを犯してしまったのでしょうか。

何故私自身が犠牲になれなかったのでしょうか。

何か粗相を致しましたか。そうであれば、お許しいただけませんか。振り出しに戻りたいのです。

……私を、母親にさせて下さい。

熱が逃げていった。本当にあっという間に、あっけなく。
出会うまでは知らなかった子鳥の暖かさ。それは自身の身体よりも大切なもので、いつしかメス鳩の体温となっていた。そうだ、掛け替えのない体温。それが、するりと、その熱が抜け落ちた。
生きた証、生きる証、生きていく証。これまで意識もしていなかったその暖かさが生活のすべてを形成し、彩っていたことに今更気付いた。愕然とした。無意識のうちに子鳥が日陰様へ無礼を働いたのか。いや、挨拶はしたはずだった。自分の命を繋いでくれるものだと疑わなかったのに、どうして失ってしまったのだろう。ずっと、その温もりを守っていけると思っていた。もし、選択肢を誤らなければ。もっとずっと大切にしていれば――。
我ながら狂っているとメス鳩は思ったが、仮定の未来が頭から離れたことはない。生き残った子鳥たちを育てている間も、一羽だけになって生活を始めたあとも。

もし、子鳥たちにもう少し注意を促していたら。
もし、旦那にちゃんと見張っているように言っていたら。
もし、食事を三日連続の虫で妥協していたら。
もし、あとちょっとだけ早く帰ってきていたなら。
将来を与えたかった。あの子も巣立っていった子鳥たちのように歩めたのではないだろうかと思った。
上空の刺すような冷風のなかに隠れる、お日様の暖かさを知る喜びを味わえたのではないだろうかと。
そんなふうに思えて仕方がなかった。
ナゲットよりも美味しい物の存在を教えてあげたり、木の実の熟れどきを教えてあげたり、誰よりも速く飛ぶコツを教えてあげたり、丈夫な巣の作り方を教えてあげたり。色々なことを続けるのが当たり前だったはずだ。その当たり前のことが、どうして自分の前でだけ消えてしまったのかわからない。将来を与えたかっただけなのに。
他の子鳥も消えてしまうかもしれないと考えると、自然と過保護

になった。守るべき子鳥が傍に残っていても、失った子鳥の面影が重なる。思いは募るばかりだった。

――だから。母鳥に言った台詞の半分は嘘である。

朝が来た。

風は大分弱まっている。木々がゆらゆらと淡い陽光にお辞儀をしている。おばあさんは珍しく早朝から留守のようで、庭はひっそりと静まり返っていた。他の小鳥たちも今日ばかりは騒がない。霜とともに気まずさが充満する。

いつもはお喋りである嘴をきつく閉ざして、メス鳩は母鳥をお墓に案内した。其処だけ羽毛のように、土は柔らかい。

母鳥がぽつぽつと思い出を語る。メス鳩はところどころ相槌を打った。

陽光が眩しい。朝が来ているはずなのに、何故だか日没であるような感覚がした。神様は厳しい。

おばあさんの引っ越しが決まった。

どうやら息子夫婦と暮らすことが決定したらしく、名残惜しそうにそれを語るおばあさんをメス鳩は祝福した。ダンボールの個数と比例して馴染みの家が殺風景になっていく。何故だか巣作りをする気もおきず、ときたま訪ねてくる母鳥の相談に乗りながら、忙しそうにするおばあさんを見守り続けた。自然と遠出する機会は減っていく。

そして、おばあさんは引っ越した。母鳥も微笑みを宿すようになって、メス鳩はやることがなくなった。

それは散り散りになった雲の切れ端が大移動を開始する日で、意気消沈した自分の棲み処を眺めながら、彼女は考えていた。この現象は、子鳥が巣立ったときと似ていると。

見慣れたものが姿を消した空っぽの家。目と鼻の先であるはずなのに、距離感がまったく掴めない。

枯れ枝にとまったメス鳩は目を細めると、やっと母親ごっこの終わりを実感した。
子鳥たちが巣立ったあと、どうしてサボテンという除け者に会ってみようと考えたのかは思い出せない。会ってみたかったのは金魚の方だったのかもしれない。確か、そうであった。罰当たりと噂される生物に、ほんの気まぐれで興味が湧いた。其処には外の世界を知らないサボテンと、気の良い金魚が居て、少々風変わりな女性が彼らを捕らえていた。外の危険を知らない――金魚の親爺と意気投合したメス鳩はそれを心から羨ましいことだと告げた。事実、金魚が命を失うまではそう思っていたのだ。
その後、愛想の悪いサボテンと話すこととなる。彼は外の世界に疎く、彼女の片足はカーテンが阻んでいた。子鳥がいるという見え透いた嘘を言及することのないサボテンの前でだけ、メス鳩は母鳥であった。
偽りの時間だ。それを証明するように彼は消えた。今更そのことに気付いたメス鳩は、少し微笑むと旅立ちの準備を始める。
雲は追いつ追われつ移動を始めている。この街にこだわる必要など何もなかった。

どうしたことか。空を飛んでいる感覚が今夜に限って随分希薄だ。何時間も酷使された両翼は、神経の入る余地もないほど冷え切っていたし、夜空は何処までも深いトンネルだった。飛んでいるのだろうか。物質という物質を飲み込んでいくかのような漆黒を前に、うなされているという表現が近いだろう。どれだけ上昇しても月の出口は一定の距離に貼り付いている。婦人が降りてこないのは飛翔できていないせいではないのかと思えてくる。
懐かしい声が聞こえた気がした。メス鳩は疲れを自覚すると、取り敢えずの寝場所を探して下降する。今日の寝床は公園の楠(くすのき)に決定だ。

何処の公園かしら？　彼女は一瞬考えたが、帰る場所がなければ迷子なんてものにはなりようがない。
その発見に満足すると、降り立った枝の葉を掻き分けながら空を仰いだ。要らないものをすべて排除した、静寂に澄んだ酸素が此処にはある。白い息を漏らすと彼女は寝る準備に入った。センチメンタルはメス鳩の性に合わなかった。

起きたのは、お日様の目覚めより少し早い頃合だった。見知らぬ土地で、何処がどの鳥の領地になっているか不明だったからである。
青白く静謐に研ぎ澄まされている夜明けの風に、小さく一度身を震わせると、メス鳩は毛づくろいを始める。身だしなみを整えたところで、眠そうに動いたお日様に朝の挨拶をすると、彼女は捕まえた気流に身を投じた。
色付く濃紺の朝焼け。緩やかに生命が芽吹き始めた感覚。ランニングをしている男性が見える。辺りは静かで、響くのは早起きの小鳥がお日様に挨拶をしている囀りだけだ。昨晩は良く見えなかったなだらかな坂が、街全体にささやかな勾配を与えていた。メス鳩とサボテンの街とはまた違い、時間の流れは小川のせせらぎのように優しい。そう感じるのはまだこの街を知らない証拠かもしれなかった。
また、あの声が聴こえた気がした。川の水流に溶かされるように、さらさらと溢れだした記憶がメス鳩を囲む。烏に襲われた日に大怪我をさせてしまった、もう一羽の子鳥だ。襲われてから数日後、メス鳩の前から忽然と姿を消してしまった、語尾にスタッカートを置いた癖のある鳴き声。
――お母さん。
最後に呼んでもらえたのはいつのことだったか。焦燥感に追い付かれないように、はばたきに力をこめて空を泳ぐ。速度を上げるほどに苦い想いを風圧が攫ってくれる。代わりにすべてを攫われれた

メス鳩は透明に冷えた。
「お母さん、でしょ――？」
耳朶（じだ）を打つスタッカート。メス鳩は振り返える。
眼下には懐かしい――子鳥の姿があった。
「……どうして」
お母さんと呼ばれた。
押し寄せる震えに身体中から力が抜けて、ほかに何も見えない。崩れるように子鳥のもとに降り立つ。
「やっぱりお母さんだ！」
ぴょんぴょんと飛び跳ねて喉を鳴らす。にわかには信じられなかった。本当に、これは夢じゃない？
だが、聞こえるのはスタッカート。
子鳥は垣根の上で走りよると、メス鳩に軽く額をぶつけた。目の前にいる。触れ合うことができる。メス鳩は目を見開いた。「……ほんとう、に？」
愛しい瞳が伏せられ、小さなかぶりが何度も振られる。
「でも……どうして？　――だって、アナタ、あの子を助けられなかった母さんが嫌で家出したんでしょう！？」
「ちがうよぉ」
「違う！？　なに、じゃあどうしてアナタ居なくなったの？　あーもうなんなの、さっさと仰いなさい！」
食いつくように叫ぶメス鳩に首をすくめた子鳥は、両翼で彼女を制止する。暁の光に青灰の羽衣は艶やかな銀翼になる。勢いよく広げられた翼は不安定に揺れて、歯止めが利かなくなったように涙が溢れた。
「だって、だって、できなかったから。人間に拾われちゃって、トラックの運転手で、家が遠くて、でもできないんだもの！　……飛べないんだもの」
一喜一憂と乱反射する銀に歪な刺傷が見えた。眼前の翼には、未だに烏色の傷が突き刺さっている。メス鳩は悟った。この姉鳥は自

分があの子を守れなかったから、怒って家出をしたのではなかったのだ。
垣根に視線を落せば、上空からは見逃してしまうだろう小さな庭。手入れを自然に任せきっているようで、雑草たちがここぞとばかりに本領を発揮している。不恰好に伸びた柊の枝は、止まり木をイメージしているのか水飲み場や餌箱をぶらさげるための細工が施されていた。庭の誰もが寄り添っている。いまや濡れてくすんでしまっている、朝焼けに溶けた子鳥の羽毛に。ここは彼女の世界だ。
また一粒。久々に見る子鳥の涙は転がって土に吸い込まれた。長年の飛行でへばりついた厄介なドロは、それに面食らったようにメス鳩から流れ落ちていく。なんとあっけないのだろう。これこそが母親の感覚なのだと思い出したメス鳩は、すべてを洗い落とすように長い長い溜め息をついた。沢山ある、躍り出かかった言葉を飲み込むのはどうも苦手だ。嘴を開く。
「そう。よかったわ、生きていてくれて」
天の日陰様。私たち親子を生かしてくださり、感謝します。
本格的に泣き出した子鳥に苦笑すると、お日様に目を細めながらメス鳩は続ける。与えられたチャンスで隙間を埋めたい。語ろうと思った。最小限の言葉で。
「――許すわ」
「なにそれ！？」
真っ黒な瞳をせいいっぱい見開いて、子鳥は猛攻した。失敗したかもしれない。嘴がスキップするみたいに軽かった。

そして、その時がくる。
大気への躍動。スピードまかせに羽ばたきひとつ。加えて旋回。
嘴を少しでも開ければ、入る空気は瑞々しかった。凍った時間の溶解。お日様から四散する金粉の衣。夜闇を支えた月の婦人が安堵を見せつつ沈む瞬間がきた。メス鳩はくるくる笑う。お日様はいま

やその神々しい全身を覗かせていた。天が一際美しくなるその一瞬に、鳥たちは競って美声を響かせる。

世界の幕開けだ。

それぞれの特徴を活かした自慢の歌声で奏でられる讃美歌は、生命の誕生時に負けず劣らず、そう称するにふさわしい。放射状の飛沫（しぶき）に天は青を取り戻し、メス鳩は力強く囀る。それに合わせるように姉鳥が鳴いた。

何故、こんなに神聖に溢れた日常を、烏や人間はたやすく壊すのだろう。

メス鳩は、自分の子鳥を勝手に拾い、小さな庭に閉じ込めた人間に憤りを感じていた。

首を振って、彼女たちは歌い続ける。

合唱が終わり、植物は眩しげに息を吹き返していた。

しかし、縁側だけがそんな爽やかな早朝とは裏腹な雰囲気を発している。不穏な空気の発生源ともいえるメス鳩は、怒りに膨れていた。平和的な一戸建ての庭で、人間には聴こえることのない警報が鳴り響く。メス鳩から後ろに飛びすさろうと、羽をバタつかせた姉鳥の翼がぱしぱしと鎧戸に当たっていた。コワイ。

「なんて、なんて図々しいのかしら。ああ、信じられない。他人様の子鳥を勝手に連れて行くなんて言語道断もイイところでしょう？

そのトラックの運転手とやら、礼儀というものを知らないわ。例えアナタが危機的状態だったとしても、あとで落ち着いてから私に報告にくるのが道理ってものです」

「に、人間にそこまでわからないよ……」

「まあっ、アナタ、人間の肩持つの！」

なで肩をこれ以上ないほど怒らせて凄むメス鳩に、姉鳥は慌てたように毛づくろいを始めた。翼の後ろに首を回して、顔を隠しながらもそもそと呟く。――この家のご主人、イイ人だよ。

「なにか？」
「……お母さん、むかしそんなに頑固だった？」
むくれた姉鳥に言葉を詰まらせると、ニ、三度喉を鳴らして誤魔化す。娘を拾った人間が、ある程度人生経験を積んだ老人なら安心できるのだが、そうでなければどうしてもエミを連想してしまって落ち着かない。心配性なのは悪い癖だ。自粛しようとして娘から視線を逸らしたメス鳩は、方々に伸びる雑草の茂みを目にして息を呑んだ。「……ねえ、猫は？」
「ねこ？」
「アナタ、逃げられないじゃない」
「あ、それはね、大丈夫なの。この家、犬がいるから。アキタケン」事も無げに、黒目をくるくるさせて姉鳥は言う。
「犬ですって！？　た、食べられたりしないの」
「うん、全然へいき、仲いいよ。えっと……、向こうの軒下で寝てる」
翼で犬小屋を指した姉鳥は、血相を変えたメス鳩を不思議そうに見つめる。
確かに、鳩とサボテンの仲がいいのだから、犬と鳩もありなのかもしれない。それにしたって、あまりに体格差のある関係にメス鳩は度肝を抜かれていた。金魚の親爺との関係を思い出す。血は争えないのかもしれない。真っ白な溜め息をつくメス鳩にまた怒られると思ったのか、わたしお腹がすいちゃった、と姉鳥は唐突に言った。
「それじゃあ、久しぶりに捕ってきましょうか。なにが食べたい？」
気を取り直してメス鳩が訊ねると、言いだしっぺの姉鳥は縁側で首を傾げた。床板を鉤爪で蹴って時間稼ぎをしようとしたが、メス鳩が尻尾を鳴らしたのでやめる。
空の青を背に、メス鳩は勝手に切りだした。
「アナタの好きなブラックベリーは、この時期、ないのよねえ……。あ、今も好きなのかしら？」
「好きかな？　ずっとお目にかかってなかったけど。じゃあ、じゃ

あ、えっと、あれ！　お母さんがよく取ってきてくれた、ナゲッシ」
「――ナゲットって」
絶句した。姉鳥を伺えば、静かな微笑みがある。彼女は大丈夫だと言って、無邪気に跳ねてみせた。
ああ、母と娘だ。
この子は甘え方をよく知っている。長女のクセに昔から一番の甘え上手だったのだから。
心地良いポジションに、弾む心を抑えきれず、メス鳩はつい吹き出してしまった。
「オーケー。待ってらっしゃい」

ナゲット調達に向かう道すがら、メス鳩は小川で久々の水浴びを堪能した。
彼女は新鮮な水が好きである。特に好むのは清流や降ったばかりの雨水で、消毒された水は汚水のようで身体に合わない。
そんなものだから、ご無沙汰していた清流に翼を浸すと、羽を包んだ冷やかさは格別に心地良かった。緩流に遊ばれてたなびく羽先に合わせ、小川のせせらぎが優しく鼓膜を撫でる。蒼波（そうは）に混じった水泡は密かな音をたててはぜ、その先で、野鳥の囀りが跳ねて聴こえた。メス鳩は水面を叩いてそのリズムを乱していく。空気が美味しい。
人間が芸術を求める遥か以前から、此処には音楽があった。香りも、光も色彩も、すべての要素は羽に触れる。
それだけではない。世界に歌を与え、種を運搬することこそが鳥類の役割だ。サボテンは酸素の提供を。魚は水の清掃を。生物はすべからく使命を託されて生まれてくるもので、そうして天の日陰様に生かしてもらっている。
しかしその法則も、どうしてだかエミには適用できなかった。人間だけが生まれながらに役割のない変わった種族であるように、メ

ス鳩には思えた。
帰れば待っている小さな空。垣根に囲われた社会には鳥のさえずりも限られるもの。
正直なところ、メス鳩は姉鳥を運転手に任せていいものか、まだ判断がついていない。
空を振り仰いだ彼女は、大きく一声鳴いて飛び立った。
判断をつけるにはただひとつ。様子を見るしかないのである。
その後、時間は過ぎていく。
メス鳩は姉鳥にナゲットを届け、翌日には運転手が差し入れたリンゴをついばんだ。翌々日ともなれば前足を重ねてあくびをする犬に「お手」と言って迷惑そうな顔をされ、その夜、人間たちの泥酔した姿を目にした。
忘れられたカーテンは開け放たれたまま。闇を押し退ける蛍光灯のライトは青白く、漏れる奇声がひどく騒々しい。酔狂な宴。メス鳩にとって、それは芝居染みた騒ぎにしか見えないものだった。明滅するTVに照らされ、いい塩梅(あんばい)になっている運転手とその同僚たち。接待にかり出された犬にアルコール度数の高いシャワーがかけられ、グラスをふざけて傾けた男が笑っている。笑っているのは部屋の誰もだ。酒の飛沫に身を振るわせた犬の毛に弾かれて、ガラス越しにしたたり落ちる水滴が視界を鈍らせる。部屋の隅に移動したアキタケンの耳はいつもより低かった。
そらみなさい、ついに本性を現した――メス鳩の眼光は険しくなり、傍らで事の成り行きを見ていた姉鳥がそれに気づいた。
「……人間はね、命が長いから。大切なものから遠回りして歩む生き物なんだよ」
いつの間にかリンゴ好きになっていた彼女は、そう言ってふと微笑む。電球の明かりを受けた姉鳥の横顔は、何処に幼さを置いてきたのだろう、まるで人間のように複雑な表情を宿す。言葉を失うメス鳩の隙をついて彼女はガラスを背にすると、普段の声音に戻って言った。

「それより、あの話の続きは？」
期待に身を弾ませる姉鳥に、メス鳩は止めていた息をつく。「まだ聞き足りないの」
姉鳥が行方不明になってからの空白を埋めるべく、お互いの話をするのが日課になってきている。
二羽の団欒のなかでもひときわ盛り上がるのは、気難しいメキシコの王様が登場するとき。メス鳩の話の中でサボテンが憎まれ口を叩くたび、姉鳥は囃（はや）したてるように笑う。彼女はサボテンがお気に入りだ。
目を細めたメス鳩は、少しずつ、気難しい王様の話を始めた。おとなしくなった姉鳥を夜空に佇む陰様が照らす。
罰当たりで礼儀知らずだった彼の台詞を反芻するうち、娘のシルエットに月の婦人を求める彼の姿が重なっていく。
――何で貴方たちは人間の味方をするのかしら？
“知らねえよ。”
メス鳩のぼやきに答えるように、何度も口の利き方を注意したあの声が蘇り、部屋からの歓声に掻き消される。
彼女は肩をすくめた。
分かってはいるのだ。エミも運転手も、それほど悪い奴ではないのだと。

すっかり昼時を越して、お日様の威力も失われてきた頃合いだった。メス鳩の視界で運転手の肢体がぴくりと動いたのは。半ば寝ぼけ混じりといった風情で開く瞼は重い。徹夜で飲んでいた影響か、まだ覚醒しきっていない頭が夢に引きずられるままゆらりと傾いたのが見てとれた。
命名するなら頭のスローダンス。
いやだわだらしないわねと、メス鳩は思わず小言を投げた。
ぐぁふ！　賛同するようにアキタケンが吠え、彼の頭が勢いよく

跳ね起きる。
途端、自分の顔中を熱烈に舐めてくる愛犬を撫でようとして、彼の手がとまった。酒のワックスにごわついた毛。その感触に青ざめた運転手の瞳にありありと動揺の色が浮かぶ。慌てて立ちあがろうとしてアキタケンの尻尾を踏み、あがった悲鳴を回避しようとした挙句に空き缶に躓いてすっ転ぶ。
人間の要領の悪さといったら。
周囲を見回す運転手と呆れるメス鳩の目が合って、沈黙が降りた。顔を逸らしたのは運転手が先。立ちあがりざまに犬の頭をひと撫ですると、彼は自分の髪を掻きまわす。腹を開放させたまま、昏々と眠り続ける同僚をまたいで浴室に入っていった。
水音が届く。
やがて縁側に来た彼は、顔色の悪い微笑みを乗せて姉鳥に手招きした。
「ビワ、おまえも水浴びするか？」
名付け親は酒臭い息で姉鳥を呼んだ。まんざらでもなさそうに喉を鳴らした彼女は、床に降りてきた筋肉質の腕に飛び乗る。舞った微風が床を撫でた。そのまま歩き出そうとした彼だったが、小さく声をあげると、メス鳩に問いかける。
「えーと、キミも来るかい？」
――ま。なんですって！？
思わず顔をしかめ、尊大に胸毛を膨らませる。翼をばさばさと振って拒絶の意を示してみせたメス鳩は、早々に常緑樹の太枝に避難してしまった。運転手に連れられるだけでも不本意だというのに、ましてや水道水を浴びるなど、考えただけでゾッとした。姉鳥が男の腕で困った顔をする。運転手は少しだけ残念そうに眉をさげたが、頭上からメス鳩に睨まれて諦めたように頭を掻いた。
潔く立ち去る素振りを見せた彼は、何か思いついたように振り返る。
「羽衣。ハゴロモってどうかな。ビワもそうだけど、キミが羽ばた

くとなんていうか、翼が銀色に光るからね。どう、ハゴロモ」
何かの雑食動物を連想させる、髭に隠れた顔立ちは真剣そのもの。二日酔いに抑揚を欠いた声がメス鳩の賛同を求めた。
人間に話しかけられるのは久しぶりだ。コトバの意図がわからずに当惑したまま喉を震わせるメス鳩を見て、何を勘違いしたのか彼は心持ち顔色をよくした。犬が待ち遠しそうに鼻を鳴らす。
「お母さん、これでお揃(そろ)いだね。ビワって名前も、『美しい羽』って意味なんだよ」
愛犬に呼ばれて歩きだした運転手の腕で嬉しそうにさえずる姉鳥は、子鳥というよりもまさしくビワと呼ぶに相応しい顔をしている。許可なく名前をつける人間なんて失礼千万でしょうにとメス鳩は溜め息をついた。それでも不思議と、羽衣と呼ばれることに悪い気はしなかった。

辺りは真冬本来の静けさを取り戻した。ひと気はなく、ときたま吹き抜ける風が体温を奪う。
尻尾を巻き上げたアキタケンをメス鳩は見送る。一風呂浴びた運転手は非番を共にする同僚たちと食料の買出しにいくようだった。湯あがりの身体をぽかぽかとさせた姉鳥は止まり木でまどろんで、音がないと寂しいだろうと、つけっ放しにされたラジオだけが息継ぐ間もなく声を発する。
時間の流れは緩やかだ。たゆたう薄雲のなか、空の端に引っかかったお日様が辛うじて、冬の刃からメス鳩を守ってくれていた。
舟を漕ぐ姉鳥の身体。西日の眩しさに目を細めたメス鳩が、畳んだ翼に顔を埋めたとき――ふいに、
柔らかな旋律が鼓動を打った。
ラジオから溢れるメロディは凍った記憶に浸透し、閉じた瞼に思わず力が籠もった。
吐き出しそうな息苦しさに首を振った。空(くう)を掻くようにして彷徨

う掠れた歌声に、無意識の心がリズムを刻む。
――すべてを覚えていた。
この旋律に初めて出会ったのは、今と変わらず肌寒い季節、家族がまだ揃っていた頃のこと。引き籠り女にも、引っ越したおばあさんにも会う更に前。当時のメス鳩は人間を信頼しきっていて、寝床の大樹は育て人の性格を象徴するように逞しかった。だからなのかは定かではない。子鳥を失った晩、その家から流れてきた月の歌はメス鳩に染みついた。
過去に封じ込めたはずの記憶が蘇る。
予想外の対峙に、逃れるべく目を開いた。風は既に夕焼けを追いやり始めている。
いつだったか話したことがあった。緑衣の影に向かって、静かに月を形取る美しい音色があるとだけ。

――私を月へ飛ばして。

ボーカルのソプラノが舞う。
思えばメス鳩がこの歌詞を教えたとき、影の主は今までになく真剣に話を聞いていた。普段ならメス鳩の話に食いつきもしない彼が。
女々しい歌詞だと失笑しながら。
そんなふうにして誰よりも月の婦人を求めた彼に、この歌を聴かせてあげられればよかった――そう考えたところで今更どうなるわけでもない。メス鳩の胸はひどく軋んだ。
どれだけ彼に外の世界を伝えることができただろう。彼の知らない、月の婦人とハトたちの物語は山ほどあった。語りつくせぬほど様々な出来事を、嘴の先で言葉に変える自信をメス鳩は持っているというのに。今ならサボテンの前で偽らずに、母親としての確かな姿を見せることもできるだろうが、それとて叶うことはないのだ。
昨夜は思い出せたサボテンの声がまたひとつ遠のき、緑衣の影ともなれば、何か重たいものに引き摺られるように分厚いカーテンの

果てへと沈んでいく。
死んだのか、死につつあるのか。
いずれにせよ、彼の面影はそろそろ過去に近づいている。
メス鳩は顔を曇らせた。
「珍しく考え事か？　今日は雨になるな」
姉鳥が降り立った。精一杯真似たつもりだろうが、演技掛かったその声は彼に比べれば1オクターブ高い。サボテンに感化されたらしい憎まれ口に苦笑すると、メス鳩は静かに答えた。
「お目覚め早々失礼ね。ただこれからの身の置き方を思案していただけよ。娘に再会してね、彼女の棲む家で私も暮らしていこうかしらって」
姉鳥は小さく息を飲んだ。眠気が吹き飛んだのか、彼女は何度も目を瞬かせる。
「……ほんと？」
「人間って私が思ったよりわかりやすい生き物のようだから。あの男も、引き籠り女も、不器用なりに私たち生き物を大切にしてくれるでしょう。ここの植物たちはあまり弁舌とは言えなくて退屈だけれど」
いつまでもサボテンのことに囚われていても仕方がない。生きていくために、見るべきものは他にある。
自嘲気味に足の痛みを堪え、優しく話せるように心掛けた。メス鳩は娘の目を覗き込む。
驚きに大きく揺れる瞳は、夕刻の月を淡くたたえている。その灯火はメス鳩に何処か、闇たちこめるトンネルの出口を思わせた。明かりを吹き消すように瞬きした姉鳥の視線はメス鳩をじっと正視する。歓喜の光は徐々に力を失い、視線はゆらりと流れて室内に固定される。
急速に冷えが増した。
お日様が沈んだのだ。お休みなさいの挨拶をしなければ。
「だめだよ」

喉もとに用意した挨拶は消え、言葉を遮られたメス鳩は娘を戸惑い見た。彼女が、これほどこわばった声を発することなど滅多にない。ましてや挨拶の邪魔をすることなど。
殊更屹然と嘴を結び、冷徹な双眸で紡がれたのは否定だった。瞬きをすることもせず、頑なな姿勢を崩すこともなく。
「なぜ……」
「だって！」
突発的に口にした接続詞の先を探すように、姉鳥は言葉を切った。
「お母さん、諦めようとしてるみたい」
断定に翼を怒らせ、凛とした眼差しで室内を睨む。視線に射られたラジオはとうに音楽を流すのをやめており、まるで旋律の消えた先を見据えているかのようだった。
「リュウジンボクをさ、――諦めようとしてるみたい」
どうして此処で彼の名が。呼吸を忘れそうになったメス鳩は嘴を上げた。
遠く離れたサボテンの名は、躊躇いもなく姉鳥の声になった。つい先日会ったばかりの友人だとでも主張せんばかりに聞こえる。
不謹慎な言動にメス鳩の尻尾が床を叩く。
びくりと翼を震わせた姉鳥は呟いた。それが確証だよと、何もかもを見透かすように。
「妹が死んだときと一緒だと思ってるでしょう？　彼のことを振り切るみたいに、この家で暮らそうと思う、なんてさ」
「そんなつもりじゃ……！」
そのつもりがなくても、と彼女は制す。
「わたしはこの家に連れてこられてから一度だって、お母さんのことを忘れたりしなかったよ。毎日毎日思い出した。二度と会えない可能性のほうが高かったけど、心が強情なほど固まって、諦められなかった。お母さんもそうなんじゃないの。彼も、そうなんじゃないの」
否定が口をつかない。焦燥感が募る。

虚を突かれたメス鳩は、もどかしく首を振って呻いていた。
「だけど、やっと出会えたんだから……」
「わたしだってもう大人なの」
姉鳥はスタッカートを強めながら、怒ったように鉤爪を踏みしめる。
「お母さんは、飛べる。天の日陰様にも見守られてる。そうやって別れから目を逸らすけど、彼に世界を届けてあげられるのは銀のハゴロモの、鳩の奥様一羽だけだったんでしょ？　わたしはそんな、架け橋をする翼が好きだったの」
「それは、ありがたいけれど、」
「人生を悟ったみたいな口ぶりで此処を選ばせたりなんてしない。妥協するお母さんなんて見たことないよ。シャンと生きてみせて。彼を見捨てるくらいならいっそのこと、――わたしのお母さんを卒業してください」
姉鳥が嘴を動かすのにあわせ、声の殆どが涙となって零れていく。それは吸い込まれるように彼女の頬を濡らし、深みを与えられた羽毛は、まるで翼の刺傷のような烏色になった。嗚咽を抑え込んで、彼女の瞳はメス鳩を突き放す。
――闇に支配されたこのトンネルの出口が、こんな低い場所にあると思うの？　此処になら、易々と、救いの出口が現れてくれると。本気でそう信じているの？
姉鳥の双眸に叱られた気がした。
瞳に映る薄衣の月は揺らぎ、霧雨のように雫が降る。
逆なのだとメス鳩は思った。
親が飛んでみせなければ、子鳥は羽ばたき方を覚えられないのに。メス鳩は嫌っていたはずだった。巣探ししかできない雌など母失格他ならないと。それでは違う。共にいるのが母ではないと。
娘だけでもこのトンネルの、外へ。
「ナゲッシの味は心残りだけどさ」
頭が痛い。

瞬間、狼狽したメス鳩は力任せに姉鳥を叩いていた。
「……いっ！」
「まったく、アナタはちょっと成長したかと思えば。すぐにこれなんだから！　そんなのいつでもいただけます！」
はたかれた頭を振って唖然とする姉鳥を半眼でかわす。落ち着かなければいけない。姉鳥の唖然が憮然になる予感がして、ふと頭上を仰ぐ。
「あー……イイお天気」
「話、逸らすな！」
「今日ってなんだか、散歩日和よね」
藍と紫を重ね合わせるように染まった空は、小さいけれど、何処までも平穏だ。怪訝そうな顔で黙り込む姉鳥に微笑みを浮かべると、メス鳩は胸を膨らませた。
「少し散歩してくるわ。往復に時間が掛かるから、数日は待ってもらうでしょうけど、急いで帰ってくるから」
「……帰って、くる？」
「そうよ。私はお母さんを留年してますからね、卒業なんてまだまだできないの。行ってきます、ビワ」
この場に腰を落ち着けようなんて考えは安直だった。もう母親をするなと言われてもしかたがない。そう思えど、メス鳩のなかに母を辞める選択肢はない。サボテンに偽ってまで母鳥をしていたメス鳩にしてみれば、人間に任せて娘を置いていくなんて気が気ではないことだ。ときおり帰るくらいは許してもらいたかった。
自分を呼ぶ声に目をしばたかせた姉鳥は、みるみるうちに笑顔になってぴょんと身体を弾ませた。
「じゃあ……うん、待っててあげる。その代わり教えてね、リュウジンボクに会えたら！」
「はいはい」
「お土産はナゲッシ！」
「はいはいはい、気が向いたら」

甘え上手の健在に、メス鳩の頬が自然とほころぶ。一羽でいることをあれほど嫌う娘だったくせに、母を説教してくれるくらいに成長してくれたことが誇らしい。

玄関側から犬の吠え声が近づく。メス鳩は空を目指して翼を伸ばした。

空を渡る。眼下では密集した大小の道路が錯綜していて、何処までも遠回りを続ける果てしない迷路のように見えた。

一直線にあのベランダを目指しながら、メス鳩は思う。

植物は生まれたときから天の日陰様を目指し、古来より鳥たちは目的地へ最短距離で羽ばたいた。つくづく自分もその血を受け継いでいて、人間に比べて命が短いからこそ、回り道は選べないのだと。

一層羽ばたきに力を込めて、気流に乗った。

純度をもって研ぎ澄まされた空気は痛いほどだったが、夜を迎えた空の闇は際限なく壮大だ。四方を埋め尽くすのは烏色のトンネル。純度の高い夜間に飛行すれば、烏に包囲される感覚に陥ったことも幾度とあった。今晩はその彼方に、煌々と輝く月の婦人が完璧な円形を維持して浮かんでいる。いつもより大きく、いつもより美しい姿で。闇に溺れないように水平を保って翼を振った。迫るトンネルの圧迫感から逃れようと、走らせた視線の先に断続的な光を見た。星でも、電灯でもない。誘導灯のように月の方角へ延びるそれは住宅街の明かりだ。

開いた出口はメス鳩を優しく招いている。誘導灯の光をいくつも追い抜けば、出口に少しずつ近づいているような気がして翼が軽くなった。

飛んでゆけるなら――飛ばしてもらうことを願う暇を惜しみたい。少しでもいい方向に進みたいなら、日陰様に願うだけでは動力が足りない。それでなくとも相手は夜の女神だ。自力で会いに行かずして逢瀬などできるわけがないのだと、メス鳩は笑った。

闇を切って飛び続ける。あの丸い光を捕まえて、サボテンの元へ届け、そして娘に持って帰れるように。
道は長く、夜も長かったが、それでもメス鳩は羽を休めなかった。
次第に夜は追いやられて空の底が銀に輝き始める。
お休みなさいの挨拶を欠かしてしまった分、真っ先に始まりの挨拶をさえずった。お日様が顔を覗かせ、世界が幕を開ける。
銀の陽光に照らされた地上には住み慣れた町の景色があって、それを認識した途端に疲れたメス鳩の翼に力が戻る。
朝を祝っているのはすべて馴染みのある合唱だ。
そのなかにも特に知った声があって、高度を下げたメス鳩は思い切り吹き出した。屋根の上で二羽がダンスをしていた。どうやらこれのせいで歌声が上滑りだったようだ。
「あーらまっ！　もう春だったかしら？」
「げ、片足！　コッチは一足先に春なんだよ、邪魔すんな！」
虹色の胸毛を反らしたのも一瞬。くすりと微笑んだ雌鳩のキスを受けて、彼はダンスさながらのステップを踏んだ。ついばむ嘴が初々しい。
あら失礼、とおどけて通り過ぎようとしたとき、ばつの悪そうな声が後ろに触れた。
「また戻って来いよ。片足がいないと、人間たち、なかなかポテシくれないんだ」
「……そんなこと言って、彼女を心配させないの。まったく貴方たちだけじゃ危なっかしくって見てられないったら。よそ見せずに、しっかり彼女を幸せになさいな」
くるりと一度旋回して、彼らに別れを告げる。
駅。高層ビル。ナゲットの店。電線に寄り添う鳩の群れ。
空の明るさと共に景色も変わる。
真っ白だ。
馴染みの鳥たちに声をかけ続けているうちに疲れで頭が霞んできていた。

飛行のバランスを取るのに精一杯。フラフラと気流に身を任せ、自分の巣を横切る。飛んで飛んで、見慣れたベランダを目にしたときにはもうお日様もかなりの位置に達していた。

あと少し。

真っ白な頭のまま、迫った壁にぶつかりそうになって慌ててベランダの屋根に降下する。

よろける片足を踏ん張って、翼をばたつかせた。大きな音を立てて屋根の上に倒れこむ。朦朧とする意識の何処かで引き籠り女の声を聞いた。

「大変なの。サボテンが……サボテンが折れちゃった！」

＊　＊　＊　＊

緑衣の王様が死んだ。

月日が過ぎて、暖かな季節を予感させる初々しい風が吹いたある日、そんな言葉を思い浮かべた。

道路ではエミが早足に母親を追いかけている。くるくる、とメス鳩は馴染みのベランダに舞い降りて笑った。先程から突いていた銀紙は破れて、嘴の刺さったその先の物体から潰れたような音があがっていた。

喜びに身体を震るわせながら、改めてこの植物のしぶとさを実感する。

「――ッテぇよ！」

「ほらほら。いつまで冬眠しているつもりかしら？　春だって近づいてるでしょうに、まったくだらしのない」

「……あ？」

「おそよう御座います、ね」

メス鳩は足元の棘を見下ろして言った。破れた銀紙のなかに、ち

らつく緑が瑞々しい。其処からあがるのは呆然とした声だ。紛れもなく聞きなれた、娘よりも一オクターブ低い声。
「……眩しくてよく見えねんだが……なんだこの状況……生き、てるのか？　……俺」
「死んでるわよ。今、ヒッキーがゴミ捨て場にアンタを捨てるところ」
澄まして言ってのけてメス鳩が道路を見下ろせば、まさにサボテンの入ったゴミ袋はエミによって放り投げられている最中だ。風に吹かれて落ちるビニール。足元で黙ってそれを見ていた彼の、ハッとするような空気が伝わった。やっと陽光の眩しさに慣れてきたのか、その間がなんだかおかしかった。
「俺の……あれ、俺の半身か！？　オイ、何無断で捨ててやがる！」
「ご愁傷様。アンタの半身は焦茶色に腐ってドロドロだそうよ。あれだけ弱ってたんですもの、ゴミ捨て場から火葬に出されるのはとめようがないわ。上半身だけでも生き残ったんだから感謝なさい」
「おいおい……」
サボテンは尚も食い下がってきたが、メス鳩にしてみれば終わったこと。死んだ下半分についてとやかく言っても始まらない。
肩をすくめて銀紙を取り除きにかかる。
嘴が上に、下に。振られるたび積もる話を喋りたくてうずく。横目で見遣るとサボテンはまだ呆然としていて、メス鳩は銀紙を破きながら事の成り行きを話してやった。
話は、メス鳩がベランダに戻ったあの日に遡る。
サボテンが折れたと。
真っ先に聞こえたのはその言葉だ。部屋から飛び出したのはエミの悲鳴じみた声だった。
言うまでもなく、それを聞いて朦朧としたメス鳩の意識は覚醒してしまう。
慌てて窓の前に行くと、いつも閉まっていたカーテンが開いていた。ガラスの向こうに目を凝らせば携帯を片手に助けを求めるエミ

と折れたサボテンの姿。せっかく目にすることのできた緑衣に目眩を覚えてメス鳩はふらついた。エミも具合が悪そうな土気色の顔をしていた。

絶望的な膠着状態が続いて、間もなくしてだ。エミが電話で呼び出した、元職場の後輩とやらが駆けつけたのか、部屋の向こうが騒がしくなった。薄ぼんやりとした頭で見れば、土色の髪をした女が衰弱しきったエミに驚いて鞄を廊下に放り出していた。

彼女はエミに駆け寄って休養を迫ったが、当人はサボテンを抱え込んだまま一歩も引かず、顔面蒼白状態で威嚇。後輩の彼女としては一刻も早くエミの看病をしたかったのだろう。威嚇する病人に根負けしたように上着を被せると、サボテンの応急処置を急いだ。

ハラハラとした時間がどれくらい過ぎただろうか。

ガーデニングが趣味なのだと話す彼女は、これからすべきことをテキパキとエミに教え始めた。

根っこの部分には見切りをつけること。上半分だけ挿し木にして賭けに出ること。腐ってしまうので水はやりすぎないこと。サボテンの身体には日差しが必要だが、弱っている状態では刺激が強すぎるので銀紙で時々身体を覆うこと。

そのアドバイスを受けてから、エミはサボテンの世話を欠かさなかった。サボテンのために外出もした。

月の婦人の美しさは計り知れない。しかもサボテンが折れた晩は満月で、普通なら、その美しさに出会った生物は皆、三日三晩夢の世界に解き放たれると言われていたのに。

「それを彼女ったら。自分も重病人だったっていうのに、アンタの看病をするために頑張っちゃって」

少しは成長したようで感心させられたことを思い出す。彼の緑衣は死線を越えてボロボロになっていたが、それでもなんとか生きることができたのは月の婦人が彼を認めてくれたからか、彼女の頑張りのお陰か、それとも彼自身の力か。

やっと銀紙を破き終えた。空に銀が舞い、メス鳩はベランダの手

すりに飛び移ってしげしげと彼を眺てみる。現れた緑衣の身体は王様とは言いがたいほど小ぶりで可愛らしく、それを口にしたい衝動がむくむくと湧きあがった。
教えてあげなければ。
調子に乗ったメス鳩は彼に指摘しようと羽を広げる。だがそれはワンテンポ遅く、エミの武勇伝に言葉を失っていたサボテンが先に口を開く。
「はぁー、ま、にわかにゃ信じられんというか、そいつは驚きだわな。しっかも……なんだ、上半身しかねぇからお前がでかく見えちま……」
彼が言葉を失うのがわかった。
メス鳩の姿をまじまじと見つめる気配。今頃気付いたのかと、メス鳩は内心溜め息をついた。
何を言われるだろう。足の痛みを抑えながら、小首を傾げてみせる。
「おい、なんだその足……お……前っ、フラミンゴにでもなったつもりか？　似合わねえだろ！」
「まあぁっ、失礼ねっアンタ！」
仮にも雌に向かって、なんて失礼な台詞を言う奴だろうとメス鳩は憤慨した。相変わらずの憎まれ口。それを野蛮だと思う一方で、しかし嬉しく感じてしまうのもまた事実だった。
そうだ。彼はこういう性格だ。口が悪くて、でも何処か義理堅くて、そんな彼だからこそメス鳩を裏切らない。
死を覚悟した彼に、このベランダで別れを告げたことがあった。彼はメス鳩からの借りを返さないと豪語したが、時が過ぎればそれですら憎まれ口の一環に思えてしまう。本人の意識するしないに問わず、借りを返さずに死ぬことのできなかった彼。その律儀さに感謝して目尻を緩める。
娘に彼のことを報告したとき、どんな反応が返ってくるのか楽しみだった。

サボテンが深呼吸をした。忙しく世界を見渡す彼に、メス鳩は尻尾を揺らすと高らかに歌う。

「さあさ！　アンタはこれから毎日、天の日陰様とお会いするのよ。礼儀を叩き込みますからね、覚悟してらっしゃい！」

喜びに吹きぬける風と、歩き出す母と娘。其処に緑衣の王様が加わった。

碧の新芽が息吹き始めた世界、最後の暗闇が光に消える。

出口はすぐ傍。

今夜はきっと月見日和だ。

第二話：羽衣の奥様（後書き）

こんにちは、綾無雲井です。

メス鳩の物語、最後までお付き合い頂き、ありがとう御座いました。
これで第二話完結となります。
またもやテーマソングは『Ｆｌｙ　Ｍｅ　Ｔｏ　Ｔｈｅ　Ｍｏｏｎ』で。

前回、第一話を終えるにあたって、サボテンが死んだとの表記を避けました。
読者様の感想を伺うと、予想以上にその伏線が成功したみたいでドキドキした記憶があります。
はやく彼の無事を話さなければ……と思い第二話を書き始めてから、約一年が経ってしまったのですね。
月日が流れるのは早い。

少しばかり、執筆中にあった苦労話をします。
第二話を書くうえで、いちばんのネックとなったのが親子関係の描写でした。

親心とは。子が親を思う気持ちとは。

綾無家の母は一般の母親像とはほど遠い位置にいるため、参考にはなりません。
これには困り果てました。鳩の親子になりきるべく極寒のベランダに飛び出して、風邪をひくなんてこともあったくらいに。
メス鳩と姉鳥は何を考えているだろう……？
頭を捻りながら書いた物語を、うちにいらしたお母様方に読んで頂

いたこともありました。
そしてメス鳩にたくさんの共感が集まったのです。
「この気持ちわかるなー」
私の母も、しみじみと呟いていました。

どの女性にも存在しているのかもしれません。
メス鳩のような母心って。

今作、使用させて頂いた作家サークルお題は『トンネル』でした。
これまた難題といえるものでしたが、このお題との出会えたことが結果として良い経験に繋がったと思っています。
満月の夜は是非、空を仰いで下さい。ほんとうに、トンネルの出口が見えますよ。
第三話でどのお題を使うかはまだわかりませんが、皆様にまたお目にかかれる日を夢見つつ。

楽しんで頂けたなら幸いです。
感想や、批評など、今後の執筆の糧となりますので、下さったら有頂天になります。
宜しくお願いします。

それでは、また今度。
他のお話で。

≪２００６年２月１２日、自宅にて≫

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9247a/

緑衣の王様

2010年10月9日22時16分発行